

Cultural Movement and Regional Radio of Soninke : Ethnographic Study on “Culture Week”

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三島, 禎子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00009517 |

研究ノート Research Note

ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局
—「文化週間」をめぐる民族誌的考察—

三 島 禎 子*

Cultural Movement and Regional Radio of Soninke:
Ethnographic Study on “Culture Week”

Teiko Mishima

本稿は2017年にソニンケ民族が中心となってセネガルで開催された「文化週間」を記録した映像¹⁾を題材に、運営側の活動と地域をとりまく社会経済的な状況を民族誌の観点から記述し、その成立要因や意義、および10年間にわたって継続してきた背景を考察するものである。開催側が掲げた目的は、(1) 海外への労働移動と世代の交代によって失われつつある民族文化の継承、(2) 宗教対立や政治的な危機によって分断された地域間の連帯、である。諸要因を鑑みれば、「文化週間」は(3) 国家の介入しない地域主導の文化運動、(4) 反エスノセントリズムの民族主体の地域運動、と言い換えることができる。他方、筆者の関心は、(5) 労働移動によって蓄積した富の価値とその利用、にあった。これらを考察の基本におきながら、取材をとおして浮かび上がってきたのは、(6) 国家と交渉する民族、(7) 「残る」ことを選択した人びとの生活戦略、(8) 伝統的社会の変革である。

This article is based on the ethnographic video of “Culture Week,” held in Senegal, in 2017, by the Soninke. It aims to analyze the factors of the establishment, including its intention and background that has been continued for over 10 years, from the standpoint of the management’s activities and the

* 国立民族学博物館

Key Words : Soninke, West Africa, ethnic culture, integration of regions, development, regional radio

キーワード : ソニンケ, 西アフリカ, 民族文化, 地域の連帯, 発展, 地域ラジオ

socio-economic situation surrounding the region. The purposes of organizers include the following: (1) inheritance of ethnic culture that has been lost due to overseas labor migration and generational change and (2) solidarity between regions divided by religious conflict and political crisis. In other words, “Culture Week” means (3) a cultural movement by regional initiative without the state’s intervention and (4) a regional movement by ethnic initiative of anti-ethnocentrism. In contrast, the author is interested in (5) the value of wealth accumulated by labor migration and its use. Based on these considerations, the survey results reveal information about (6) the people that confronts the nation, (7) the life strategies of those who have chosen to remain in the country, and (8) the transformation of traditional society.

| | |
|-----------------|-----------------------|
| 1 問題の所在 | 3.4 運営形態への考察 |
| 2 概要 | 4 インタビュー |
| 2.1 調査地の概要と論点 | 4.1 FM ジーダ局長 A 氏 |
| 2.2 調査の経緯 | 4.2 「コーディネータ」B 氏 |
| 2.3 映像取材の意義 | 4.3 FM ジーダのアナウンサー G 氏 |
| 2.4 「文化週間」の成り立ち | 4.4 女性グループのリーダーたち |
| 2.5 文化運動の原動力 | 4.5 ガブ村の村長 S 氏 |
| 3 「文化週間」の内容と進行 | 4.6 帰還移民 D 氏 |
| 3.1 文化週間の演目 | 4.7 小括 |
| 3.2 主体者と参加者 | 5 考察 |
| 3.3 行事の進行 | 6 おわりに |

1 問題の所在

本稿で扱う「文化週間」とは、セネガル、マリ、モーリタニアの3か国にまたがるセネガル河上流域に居住する複数の民族が、それぞれの文化を紹介する行事²⁾である。セネガルのソニンケ民族が中心になって10年以上にわたって継続してい

るが、民族という分類に収まらない複数の主体が関わっている。地域ラジオ局は運営と実施にあたり、ラジオ局が組織した女性グループはそのなかで重要な役割を担い、楽師（グリオ）³⁾ は行事の進行において伝統的な役割を演じている。ラジオ聴衆者や国内外への呼びかけに応じた篤志家は、寄付をとおして参加する。「文化週間」の会場となる村々の人びとは当事者に位置づけられ、首都や隣国など村外から訪れて舞台を見学する「招待客」もまた、当行事の意義を高める重要な役割を担っている。

筆者はセネガル河上流域のソニンケ民族の移動現象について、20世紀後半からの地理的拡大を主軸に人類学的調査をおこなってきた。本稿も基本的にはその延長線上に位置づけられるが、現在進行形の「文化週間」という現象を理解するうえでラジオの役割が看過できない。ここでラジオの存在が特別な意味をもつのは、ユネスコが50年以上前から「地域ラジオ」の設立を推進してきたという経緯である。1951年にはインドで第1号が発足し、アフリカでも1960年にガーナで始まった。1966年には民族語による地方教育ラジオという位置づけでルワンダとタンザニアがパイロットプロジェクトの対象になった。これが今日の「地域ラジオ」とされるものの母体である。1982年からユネスコとフランコフォニー国際機関⁴⁾は積極的にこの計画を推し進め、1990年代にはほとんどのアフリカ諸国で開局が進んだ。ユネスコが推進する地域ラジオは、社会コミュニケーションと民主化の核になるとともに、農村開発の課題についての意識を高め、また伝統的な口承文化を広め、地域文化と言語の発展に寄与するとされる。その後、プロジェクトは「地域マルチメディアセンター」(Centres multimedia communautaires)に発展し、同施設の使用料を地域ラジオの運営資金に充てるなどの措置が編み出された。セネガルにおいても2009年から2013年のあいだ首都ダカールのユネスコ事務所によって、同センターの設立が進んだ⁵⁾。

このように発展途上国における地域ラジオの発足にはユネスコとそれを受け入れた国や地域が大きく関与している。そこには国際機関によるこれらの国々の民主化への介入という構図が見え隠れするが、それは世界の政治力学を対象とする開発学や政治学の領域に預けることにして本稿では検討しない。むしろ、ラジオ局と人びとの取り組みの実態を描き、地域とそこで起きている現象を複合的に考察することに重点をおきたい。このような立場からの事例報告はユネスコの報告

書⁶⁾や新聞記事、インターネットサイト⁷⁾などにあらわれ、コミュニケーション論における研究も出始めている。Y. ジャニユはセネガルの地域ラジオを開発の手段として考察した。この論文では地域ラジオの成り立ちと実態についての包括的な情報がまとめられ、セネガルにおけるメディアの普及と市民社会への影響、および開発における役割について言及されている (Diagne 2005)。A. ジムネはジャーナリスト出身で、セネガルの首都ダカールのある地域ラジオ局を調査し、存続が困難になった状態から脱出する過程を描き、ラジオ局スタッフと聴衆者のつよい結びつきから説明しようとした (Jimenez 2019)。これらの論考はユネスコによる地域ラジオの概念にもとづいて地域ラジオを開発活動の母体ととらえているが、分析の主眼はやはりラジオそのものとラジオ局の機能に限定されている。

本稿の出発点は、なぜ人びとが一見何の得にも損にもならない文化運動というようなものを継続しているのかという疑問である。それに答えるには、ユネスコのプロジェクトの成果や影響を評価したり、ユネスコが作り上げた地域ラジオの概念に現象をあてはめて考察するのでは不十分である。むしろそういった枠組みに入りきらないものをすくい上げて、「文化週間」をめぐるラジオ局と人びとの主体的な取り組みの実態から現象を理解したいと考える。それについては映像番組でも一定の理解を示したが、視覚的な面で「文化週間」で主体者が選び披露した演目そのもののインパクトがより強く出ている。本稿では、映像のなかでは言及しきれなかった部分を、運営側の活動と地域をとりまく社会経済的な状況を考慮しつつ、「文化週間」の成立要因や意義、および10年間にわたって継続してきた背景に注目して民族誌的に考察するものである。

2 概要

2.1 調査地の概要と論点

現在進行形のこの現象を理解するために、セネガル河上流域⁸⁾に故地をもつソニンケ民族と同地域を取り巻く状況を踏まえておく必要がある。ソニンケは、歴史的にはサハラ交易やサヘルと森林地帯をつなぐ遠隔地交易に従事し、アラブ世界と交流した商業民族の伝統をもつ。15世紀以降、西欧諸国がアフリカに進出す

ると仲介商人として知られ、大西洋奴隷交易では西欧人に奴隷を供給するとともに、貿易船へ積み込む農産物の生産、流通、販売を手掛ける企業家的側面をもった商人として活躍した。植民地時代には、フランス商館に出入りする認可商人となる者も現れる一方、落花生やカカオなどのプランテーション、鉄道建設、鉱山での採掘などに従事する労働者としてアフリカ各地へ自らが移動した。またフランス商船の船乗りとなったり、世界大戦中は宗主国フランスの兵士として従軍した。第二次世界大戦後はフランスの経済復興に労働力を供給し、その後も労働移動は生計の主たる手段となっている⁹⁾。他方、アジア諸国で安価な工業製品を買い付け、アフリカ各地へ輸出し、販売する商業活動が、1990年代から盛んにおこなわれるようになった¹⁰⁾。

このような活発な経済活動がおこなわれてきた反面、内陸に位置するセネガル河上流域は植民地時代以降、政治や経済の中心から物理的な距離によって隔たっている。沿岸部では開発が進んだのに対し、内陸への行政の関心は薄く、経済や社会の基盤整備が遅れたとともに、ソニンケが権力の中核に入り込むこともなく、物理的な距離を拡大している。またソニンケは父系制で内婚を好み、文化や言語に対してはきわめて保守的な民族集団として知られる。

ソニンケの移動の歴史を、筆者は「離散と回帰」(三島 2011)という概念から説明してきた。還流型の移動において人びとの物理的な離散は故地への帰還によって完結するが、それは民族文化への帰属意識と世代を越えた故地への回帰をともなう。この理解のもとに「文化週間」を説明しようとするならば、主催側が目的として掲げる民族文化の継承は、離散と回帰の連関において必要不可欠なものである。また、回帰することで得られる名誉や威信の表象にも、民族文化の継承は重要な手段である。あるいはまた、民族文化を継承することこそ移動と労働で得られた富の象徴となり得るのではないかという推論も成り立つ。

他方、労働移動への参入は国家の周辺に置かれ開発が遅れたことによる貧困から説明され、文化的境界の強調はソニンケ社会への偏見を増幅した。そして国家のなかにおける周辺性はソニンケ自身が自負する経済的な優位とは裏腹に、自他ともに認める既成概念になっている。この脈絡から「文化週間」を位置づけるとすれば、国民国家やグローバル化に反する民族主義ととられかねない。

ここで主催側が提示する「文化週間」の理念に立ち返ってみると、これらの仮

説がどれも外的外れであることが判明する。まず「海外への労働移動と世代の交代によって失われつつある民族文化の継承」について検証してみたい。たしかに民族文化の継承は、海外への労働移動や世代の交代によって危機感を警鐘する現象となっていることは否定できない。しかし、この運動の主体は故地に残っている人びとであり、名誉や威信、あるいは富の象徴として帰還した移民が再獲得しようとするものではない。また複数の民族を抱える国家が、民族間の対立を避けるために認めた公式な文化運動でもない。この行事は完全に地域主導でおこなわれている。ここで重要なのは「文化週間」が「国家が介入しない文化運動」という点である。

次に掲げられている理念「宗教対立や政治的な危機によって分断された地域間の連帯」は、セネガル河上流域の平和を希求するものである。この地域ではかつて西アフリカ最初のガーナ王国（8世紀あるいは4世紀頃～11世紀あるいは13世紀とも）がソニンケによって建国され、その後、諸王国が興亡を繰り返しながらも、共通の文化や習慣をもつ人びとが生活してきた。しかし、1989年に遊牧民と農耕民の伝統的な諍いが発端となり、セネガルとモーリタニアにおいて外国人排斥運動が過激化し、紛争に発展した（三島 2001）。その後、両国は和解したが、国境地帯の伝統的な土地保有は形骸化し、人びとの交流も減少した。それに加えて、マリでは独立を求めるトゥアレグの武装蜂起¹¹⁾や、イスラーム過激派による活動が活発化し、生活の危機を感じた住民が周辺国へ移動し難民化している。このような状況を踏まえると、「文化週間」は、民族文化を表象する運動でありながらエスノセントリズムに陥らない民族主体の地域運動であると換言できる。

以上のように観察者の分析枠は、「文化週間」の主催側の意図する方向と一致しない。そればかりか、行事の公式な理念さえも人びとに共有されているとは限らず、映像取材をとおしてさまざまな行為者が異なる意図のもとに「文化週間」に参加していることが見えてきた。最初の疑問に立ち戻れば、それぞれの立場によってもたらされる益が異なるゆえに、人びとが得にもならず損にもならないような文化活動に関与することができると考えられる。この点は「文化週間」の実体を描いたあとで明らかになってゆく。

2.2 調査の経緯

「文化週間」の最初の調査は2013年1月であった。行事の「コーディネータ」の役職にある篤志家で、実質上の大会長を務めるB氏から誘いがあり、民族文化を紹介するプログラムに先立っておこなわれたシンポジウムでの発言を依頼されたのがきっかけであった。

6回目の開催を迎えたこの年は、セネガル河上流域でおこなわれる「文化週間」の前夜祭的位置づけで、首都ダカールで大規模なコンサートが開催された。中国の援助で作られた1,800人を収容する新しい劇場はほぼ満席状態で、国内外で活躍するミュージシャンや伝統的な楽師たちが演奏や踊りを披露した。

コンサートの4日後、「文化週間」は場所をソニンケが集住するセネガル河上流域に移した。コンサートの運営スタッフはもちろん、多くの「招待客」と取材陣が首都から800キロメートル以上を移動して、会場のD村に移動した。

翌日は、地域出身の歴史学者であり政治家でもあるアブドゥライ・バチリ (Aboudoulaye BATHYLI)¹²⁾ 氏の出席のもとに「文化週間」の理念についてのシンポジウムが開催され、筆者もソニンケについてのこれまでの研究を紹介する機会を得た。

そして、その晩から数日間にわたって、「招待客」と取材陣、地域住民が集まるなか、ソニンケや近隣地域に共住する民族がそれぞれの民族文化を紹介する踊りや歌、寸劇などを披露した。

この一連の行事に参加したことで、ソニンケ社会を理解するあらたな側面が見えてきたとともに、さまざまな疑問が生じた。第一に首都ダカールでの大々的なコンサートを開催する意義と運営経費の出所、第二にダカールから多くの観客がセネガル河上流域での行事に参加する理由とその費用の出所、第三に民族文化を披露する行事の意義と運営形態、第四に表象される民族文化そのものの内容、である。最初の2点については、2013年の調査である程度の実態が把握できたが、あとの2点についてはわからないことが多かった。それには、たんなる参与観察や聞き取り調査よりも、より対象に踏み込むことが可能な映像取材というかたちが有効ではないかと考え、2017年に10年目を迎えた「文化週間」についての映像を記録するに到った¹³⁾。

2.3 映像取材の意義

上述の2点について検討する過程で、日本人である筆者が取材班とともに現地へ赴いたことの意義が、主催側にもあり、「文化週間」の全体像を理解するために重要であることが判明した。そのことについて、2013年の調査を振り返りながら、順番に検討してゆく。

まず、前夜祭としておこなわれた首都でのコンサートの位置づけについてである。

大劇場でのコンサートを準備し当日の人員配置や進行を采配するのは、劇場の専門スタッフではなく、国内在住のソニンケの人びとである。開催も軌道に乗った6年目とはいえ、その企画力と実行力は「文化週間」全体をとおして目に見張るものがあった。

当初、筆者はソニンケ移民が故郷の開発に投資したように（三島 1997; 2002a; 2002b）、この催しも移民の経済的な後押しによるものだと考えた。またなつかしい民族文化に触れるために、移民が帰省する機会になっていると考えた。というのは、移民による開発への共同投資がある種の威信財として機能していたという背景があったからである（Mishima 2014）。家族の生活が潤い、地域の社会施設が整ったあと、文化への投資は移民の威信を高める格好の手段であるかのように見えた¹⁴⁾。しかし実際はまったく異なっていた。経済的には移民ばかりではなく政府や援助団体からの支援はなく、主催側が自前で調達している。たとえば、劇場の借りに130万 CFA.F¹⁵⁾、日本円でおおよそ24万円が必要で、これを「コーディネータ」B氏が立て替え、ラジオやテレビを通じて呼びかけた一般からの募金と入場料2千 CFA.Fで賄った¹⁶⁾。

コンサートの出演者は海外で活躍しているミュージシャンが多い。彼らには出演料が支払われていないが、無報酬でもソニンケが企画するこのコンサートの舞台に立ちたいという演者が多いと聞く。もっとも出演料がなくても演者は観客からの「おひねり」を期待できるうえ、B氏からは航空運賃を受け取っている。B氏が声をかければ万端を期して駆けつけるのは、費用や報酬といった金銭的な利害関係ではなく、伝統的な互酬¹⁷⁾の関係によるものである。

コンサートは「ソニンケのフェスティバル」とよばれているが、出演者はソニ

ンケに限らず、会場もあらゆる人にひらかれている。観客席には少なからずの「招待客」の姿もあった。大臣や行政の役人など政府の要人、ソニンケ出身の著名人、そして首都在住のソニンケの人びとが日々の生活で交わる隣人や職場の同僚などが、主催側から招かれていた。すなわち、コンサートは自発的に訪れた観客を楽しませる場であると同時に、「招待客」へ何らかのメッセージを訴えかける絶好の機会でもあり、「招待客」の存在によって観客全体に何らかの印象を植え付ける役割も果たしていた。そのメッセージとは、ことさら民族性を主張せず自然に生じるように操作されたソニンケの存在感である。新聞社や国営テレビ、国内外の民間テレビなども招かれ、特集記事や番組を報道することでそれに一役買っている。筆者の参列も意を介さずに外国人という範疇で、ソニンケへの関心を示すことになった。このような「招待客」は、のちに述べるようにセネガル河上流域での行事にも不可欠な存在として認識されている。

「文化週間」はソニンケの人びとによって開催されるが、彼らだけが集結する機会ではない。ダカールでのコンサートも伝統文化に触れるというよりは、消費としての文化に大衆が群がっているさまに近い。都会で育った若い世代のソニンケたちは通学を優先して、遠い地元で開催される行事には参加しない。筆者には、民族文化を継承する主体となり得るダカールの子どもたちが流域での行事に不在であることが不思議でたまらなかったが、「文化週間」の一義的な意図は自らの民族社会に対してではなく、対外的にソニンケの存在を主張することにあつたとも考えられる。

以上は2013年の調査から推測した内容であるが、この前提に立ちながら2017年の映像取材を振り返ると、われわれ取材班の存在は、ほかの「招待客」と同様に、ソニンケの存在価値を高めることに一役買ったといえよう。そして、異なる立場の主体によって「民族文化を披露する行事の意義」は多義的であることが見えてくる。以下では、「文化週間」の成り立ちについて記述したのち、第3章で行事の主体と参加者、および運営形態に注目しながら考察を進めることにする。

2.4 「文化週間」の成り立ち

「文化週間」の発案者はA氏である。A氏は地域FMラジオ局ジエダの局長を務め、首都ではなくセネガル河上流域に生活の拠点を据えている40代のソニンケ

男性である。重要な点は A 氏がソニンケの男性としては第一選択肢である海外への労働移民とならずに、地域社会のなかで生活していることである。さらに補足すれば、彼はソニンケ出身の歴史学者であり政治家としても著名な先にも述べたバチリ氏の信奉者であり、セネガルの国立大学で法学を学んだあと、同氏の要請で開局 2 年目の 2001 年から地域 FM ラジオ局を担うことになった。

FM ジーダはバチリ氏の積極的な先導で開局した地域ラジオ局である。先に述べたように、地域ラジオはユネスコの国際的な開発プロジェクトの一環である。ジーダはセネガルにある 100 を超える地域ラジオ局のひとつであり、ソニンケ、フルベ、バンバラ、ウォロフ、ハスンケ、ハサニア、フランス語の七つの言語で放送する。セネガル河上流域のバケル県の県庁所在地に本局を置き、首都ダカールに支部をもつ。電波は国境を越えセネガル河対岸に届き、インターネットを介して海外でも聞くことができる。ジーダという名称は、バチリ氏の命名で、ソニンケ語の繁栄 (JIIDA) を意味する。しかし、A 氏が局長に就任した当時、ラジオ局の運営ははかばかしくなく¹⁸⁾、彼は同じソニンケの G 氏とともに抜本的な立て直しを図った。

ふたりはまず FM 電波が届く地域をバイクで地道に回ることからはじめた。セネガル国内だけでなくマリ、モーリタニア、ガンビアなど近隣諸国の村々を訪れ、人びとがどんな番組をラジオ局に望んでいるのかを綿密に聞き出した。そして各村に無給の「特派員」を置き、そこからニュースを収集したり、ラジオで流してほしいお知らせなどをわずかな料金を募ることにした。特派員の役割を担っているのは、どんな村にもある誰もが利用する雑貨屋である。A 氏はまた移民が滞在するヨーロッパ諸都市を巡り、インターネット上で聞くことができるラジオで移民と地域のネットワークを作った。2017 年当時、国内外の特派員の数 は 107 を数えた。

しかし冠婚葬祭などのアナウンス料金は微々たるもので、ラジオ局の運営費をまかなうにはほど遠く、ほかの資金源を探す必要があった。セネガル地域ラジオ連合 (Union des Radios associatives et communautaire) が定めた憲章によると、地域ラジオは政治運動に関連した放送を禁止されているほか、企業の宣伝をすることも認められていない¹⁹⁾。そのため、このふたつは資金源にはなり得ない。また寄付も一時的であり、不安定かつ不確実である。

そこで考え出したのが、「文化週間」である。前述したように、「文化週間」はメディアをとおして国内外へ募金を呼びかけることで開催される。募金はソニンケからだけでなく、ラジオやテレビで行事の開催を知った一般の人びとからも、ディアスポラで海外にいる同胞からも寄せられることが期待できる。とくに首都ダカールでのコンサートは、大きな収入を期待できるうえ、ソニンケの存在を知らしめる絶好の機会である。収支が釣り合わない年もあるが、それでも実施することを重視している。

首都でのコンサートが「招待客」をのぞいては不特定多数の観客を対象にした行事であるのに対して、ラジオの本拠地で開催する「文化週間」は行事の中核であり、主催側の期待も大きい。ここにも募金が集まってくるものの、実際は住民や「コーディネータ」個人の持ち出しがかなり多い。主催側の期待は、行事そのものへの経済的な支援よりも、後述するようにソニンケをはじめとする地方の民族文化を力にして中央政府の関心を引くところにある。そのためなら持ち出しも厭わない覚悟をもちつつ、二つの行事は効果的な仕組みと実施母体によって運営されている。

これはA氏の発案である。セネガル河上流域のソニンケの村々では、ほとんどの家から移民を送り出し、生活の多くを移民からの送金に頼っている。それに対し、A氏は地域のなかで循環する生活を理想と考え、移民の妻たちを組織し、村ごとにリスナークラブを組織した。彼女たちはまずラジオの聴衆者であり、同時に熱心な支持者である。A氏はリスナークラブを育て、小規模な経済活動を展開するグループを立ち上げて、彼女たち自身の経済的自立と自由を支援した。そして地域全体の連合を立ち上げ、女性組織の連帯を図った。女性グループ²⁰⁾はラジオと局長のために「文化週間」で披露する演目を考え、自ら出演する。またグループの活動によって得た収入を使って、ダカールからの一行に寝食を提供する役割を担う。

このように確立された経済基盤と運営形態は、実によく考え抜かれた効果的な仕組みである。女性たちはグループ活動によってささやかな収入を得ることができ、ある程度の経済的自立と自由を手にすることができた。それによって「文化週間」の担い手となり、彼女たちに自信と誇りをもたらした。

セネガル河上流域出身のB氏は親戚でもあるA氏がラジオ局の局長になったと

きに、ラジオ局の「コーディネータ」という名誉職を委任された。「コーディネータ」として実質的な仕事はなかったが、「文化週間」の開催にあたって大会長という立場で参加を依頼された。最初は A 氏が考えたような大それた行事が地方で開催できるのか半信半疑に思っていたという。しかし実際にその場に立ってみると同胞が成し遂げたことの大きさに驚愕し、以後、協力と支援を惜しまないようになった。B 氏の役割は、行政との折衝やメディアへの広報、ダカールの著名人や政府の要人を引き連れてくるなど、対外的な立場での対応である。その陰で金銭的な支援もおこなっている。大会長として「文化週間」に参加するうちに現地の人びとから大きな敬意を払われる存在になったが、彼を引き込んだのは A 氏の力にはかならず、それゆえ調整役を意味する「コーディネータ」の呼び名を謙虚に固守している。

A 氏はまた「文化週間」をソニンケだけの民族祭にはせず、前述したように「宗教対立や政治的な危機によって分断された地域間の連帯」を目指し、古来、ソニンケをはじめとする諸民族が習慣や文化を共有しながら暮らしてきたセネガル河上流域の平和を希求するための装置に仕立て上げた。それは、「とどけ連帯の声」(Ondes d'Intégration)²¹⁾ という標語に凝縮されている。フランス語で統合を意味する [intégration] は、移民の同化を統合ということばに置き換えるようになったフランスの政治用語であるが、彼らは地域の連帯という意味で使っている。移民の送出地域であるからこそ、あえてこのことばを使いながらも、権力から強いられる統合ではなく、むしろ自発性を内在しうる連帯を強調したかったのだと理解できる。またラジオ電波を意味する [ondes] は、電波に乗って広がる声を象徴しているといえよう。

以上の状況をまとめると、「文化週間」は地域ラジオ局が存続するために資金獲得の手段として始まったが、女性たちを巻き込み、地域の活性化をうながす原動力になっている。そのことは、移民の仕送りに依存した従来の生活への反発と改革を目指すものでもある。また地域ラジオがソニンケの専有物ではないように、「文化週間」は民族と国家を越えて地域全体の連帯を目指している。それと同時に、中央政府の関心をセネガル河上流域という後発地帯に引き付けるための文化活動として位置付けられる。

このような地域主導型の開発理念は世界的な傾向であるが、A 氏がそれにこだ

わるのはセネガル河上流域という地域の特殊性と無関係ではない。次節ではその点を明らかにしてゆく。

2.5 文化運動の原動力

本章の冒頭(2.1)で述べたように、ソニンケ民族は歴史をとおして離散と回帰に特徴づけられる移動とそれにとまなう経済活動を展開してきた。その後、西欧諸国の進出とともに、商品を流通する商人から、自らが労働に従事して賃金を得る労働移民になった。そのことはソニンケ社会を理解する一側面ではないが(三島 2011; Charbit and Mishima 2014)、従来の移民研究では労働移動は貧困というプッシュ要因から説明され、セネガル河上流域もそういった位置づけを与えられた。その結果、旧宗主国のフランスをはじめとする先進諸国からの開発援助²²⁾が活発におこなわれるようになった。

移民の受け入れ国であるフランスは、第1次オイルショックを受けて1974年に新たな移民の流入を制限する一方、移民の帰還支援と送り出し社会への経済援助に乗り出した。それは同地域の生活や社会に少なからず影響をおよぼしたのだが、結果的に見れば成功したとは言い難く、「援助の墓場」をたくさん作り出した。開発援助プロジェクトが成功しない理由は、別稿で論じているようにソニンケの身分社会に由来するという見方や(三島 1997)、ソニンケ社会が経済活動において生産よりも流通や金融を重視する傾向がある(三島 2011)ことから説明を試みてきた。

一方、移民たちは出身地域の社会開発に共同で出資し、各村では競うように学校や診療所、イスラーム礼拝所などが建設された。移民の送金によって村に残った家族の生活は向上し、家の建て替えも次々とおこなわれた。

このような状況を鑑みると、低開発で遅れた地域というイメージは適当ではなく、首都から離れた周辺地域への偏見にみちた見方ではないかと思われる。実際に、セネガルの他の地域に比べると人びとの生活は豊かであり、ソニンケの経済活動は労働移動にとどまらず、アジアとアフリカをつなぐ貿易に拡大し(三島 2002)、国内での不動産の取得やそれによる収入も可視化してきている。

しかし、セネガル河流域に住む人びとにとって、ソニンケ社会が総体的に豊かであっても、首都からの交通手段が整備されていない辺境地帯に住むことは現実

的な困難として立ちはだかっている。道路は穴だらけで、いまだに道なき道を通らなくてはならず、整備された自動車でも 800 キロメートルを超える距離を移動するのに丸一日はかかる。道路の建設や電気の整備などが遅れていることは、植民地時代から中央権力の周辺に置かれ根本的な開発が軽視されてきた結果であるという思いを人びとは抱いている。また「援助の墓場」を目の当たりにしてきた地域の倦怠感や人びとの重圧感となっているとともに、労働移動の道を選択しなかった人たちに何らかの使命感を与えたにちがいない。それが地域ラジオをとおした一連の活動につながっていると考えられる。

3 「文化週間」の内容と進行

3.1 文化週間の演目

「文化週間」の映像を記録する目的は、その全体像を把握して、運営形態を明らかにし、人びとにとっての意義を見出すことにあった。行事そのものは民族文化を表象する舞台から構成されたが、複数の民族による文化そのものの内容に踏み込むことには限界があり、表面的な扱いになる恐れから本稿では分析の対象とはしない。その点については、後述するように別の手法から取り組むことを考えている。本章ではラジオの本拠地で開催された「文化週間」中に披露された演目のテーマを紹介し、最低限の説明を加えるだけにとどめる。

期間中の 5 日間、24 か村で予定されていた舞台は、村内で不幸があったために急遽取りやめになった 4 か村を除く 20 か村で開催された。セネガル河流域は歴史的にソニンケが実権を握ったガーナ王国の支配した土地であったため、今日でもソニンケが多数を占めるが、地域の連帯を掲げる「文化週間」は近隣の民族集団を引き込んで、異なる民族文化を紹介し合う場となった。

実施日、および予定されていた演目のテーマと民族は以下のとおりである。おもな開催地は地図 1・2 に示している。

・2017/11/24 ジャワラ村：開会式と藍染め（ソニンケ）

開会式には県知事や地域出身の国会議員などが列席した。

染織を専門とする女性たちから藍染めの技法が紹介された。藍染めはソニンケ

の民族文化を象徴する生業のひとつであり、古来、藍染めの織布は重要な交易品であった。染織を営むリネージの女性は鍛冶屋の男性と婚姻関係を結ぶことができる。どちらもソニンケを含むマンデ系民族に共通する職能集団の身分のひとつである。

- ・2017/11/24 ベマ村：弔問のみ
- ・2017/11/24 アラヒナ村：娘の結婚を喜ぶ母の歌（バンバラ）
ソニンケと同じマンデ系民族のバンバラ語による歌と踊りが披露された。
- ・2017/11/24 ボルデ村：結婚式（ソニンケ）
花嫁が結婚式の日には花婿の家に向かう様子を再現した。結婚にいたる手続きや結婚式のあいだ、新郎新婦にはそれぞれ特別の関係にあるリネージのなかから年上のイトコや友人が付き添う習慣がある。花嫁の付き添いは1週間、新郎の家にとどまり、新婦の生活の世話をする。
- ・2017/11/25 トゥリメ村：結婚式（バンバラ）
花嫁は母親が娘のために用意した衣類や金銀の装飾品をはじめ、調理道具などの生活用品に取り囲まれ、花婿の家に向かう準備をしている。年上の女性たちが花嫁の沐浴を手伝うが、それが済むまではふつうの椅子ではなく白の上に座ることになっている様子などが演じられた。
- ・2017/11/25 ジャバル村：結婚式（フルベ）
伝統的楽師（グリオ）がフルベの王を讃える歌を奏でるなか、花嫁は年上の女性たちの手助けで沐浴を済ませ、白い衣装に身を包み、ヒョウタンで作ったひしゃくで顔を隠し、衣服が入った行李や新婚生活で使う料理道具をたずさえる女性たちに付き添われて花婿の家に向かう様子が再現された。
- ・2017/11/25 マルサ村：水瓶作り（ソニンケ）
水瓶作りは女性の生業であり、染織にたずさわる女性と同じように、鍛冶屋の男性と婚姻関係を結ぶことができる。一般家庭で水を汲み置くために欠かせない生活用具であるとともに、布の染織に使う藍を発酵させる容器でもある。泥と草を混ぜ合わせて成形し、火を熾して焼く製作過程が再現され、実際に藍で染まった水瓶も紹介された。
- ・2017/11/25 マンジュンダハ村：伝統的な農作業（フルベ）
移民からの送金のおかげで何でも買うことができるようになった今日の子ども

たちに、伝統的な農業の厳しさや、収穫した作物を子どもに与える母の喜びなどを伝えようとした寸劇が演じられた。

・ 2017/11/26 アマジ村：奴隷の踊り（ソニンケ）

ソニンケをはじめとするマンデ系社会では、「奴隷」という世襲制の社会身分²³⁾がある。20世紀初頭植民地政府から奴隷制廃止が宣言され、公式には「奴隷」はいなくなった。演目は開放された奴隷の喜びを表す踊りであった。

・ 2017/11/26 アルンドゥ村：クスクス作り（ソニンケ）

トウジンビエやモロコシなどの伝統的な穀物は、収穫後の脱穀や製粉などの準備に時間と労力がかかるため、人びとは料理の幅も広いコメ²⁴⁾を好むようになった。雑穀を使ったクスクス料理²⁵⁾は、貧しさや時代遅れのイメージもあり敬遠される傾向にあるが、地域の作物を利用した郷土料理である。かつて食生活の中心にあった雑穀を、クスクス作りを実演しながら振り返った。

・ 2017/11/26 バル村：（ソニンケ）弔問

・ 2017/11/26 ガブ村：結婚式（フルベ、ソニンケ、バンバラ）

三つの民族集団が共住する村で、それぞれの民族文化を紹介するために結婚式の演目選ばれた。顔に入れ墨をほどこし、伝統的な衣装や装飾品を身に着けた女性たちが民族文化の美を表現した。

・ 2017/11/27 クガニ村：（ソニンケ）弔問

・ 2017/11/27 ゴルミ村：（ソニンケ）弔問

・ 2017/11/27 ヤフェラ村：馬の演舞と若い女性たちの踊り（ソニンケ）

ソニンケの家で白馬を保有するのは社会的威信を示す象徴のひとつである。決して農作業や移動のために働かせることはなく、飼い馴らして、さまざまな歩法を教え込み、尾をヘナで染めて美しく仕立て上げ、儀礼に備える。この白馬を操って、見事な演舞が披露された。

未婚の女性たちが、昔から伝わる「カメレオンの踊り」を従来通りに踊ったあと、同じリズムを現代風な振り付けに変えて紹介した。若い世代が伝統文化にとらわれずに、あたらしい民族文化を創り出している例である。

・ 2017/11/28 ムデリ村：薬草と伝染病（ソニンケ）

伝染病の流行に対して、薬草を使って子どもを予防する伝統的な知識と方法が紹介された。会場では寸劇で実際に用いた「薬」に子どもを抱えた女性たちが

殺到した。

- ・2017/11/28 ガラデ村：ムスリム神学生の踊り（ソニンケ）

古来、サヘル地帯には商業と宗教の有機的なネットワークがあり（坂井 2004）、イスラームを学ぶために人は移動した。今日でもイスラームの導師のもとにはたえず神学生が集まってくる。親元を離れて、物乞いをしながら勉学をする神学生に、村の未婚の女性たちが食事をふるまう様子が紹介された。

- ・2017/11/28 ガンデ村：（ソニンケ）弔問

- ・2017/11/28 マナエル村：仲裁者の役割（ソニンケ）

妻は夫から食費をもらっていないばかりか、自分ばかりが働いていると不満を抱き、食事を作らない。夫の弟の仲介で夫婦間のもめごとは解決し、夫は妻の作った料理を食べ夫婦は平安を取り戻したという日常的な場面が演じられた。

- ・2017/11/28 チアブ村：第二婦人の結婚式（ソニンケ）

イスラームの習慣から一夫多妻制が認められているが、現実には僚妻のあいだのもめごとは珍しくなく、苦勞も多い。演目では第二婦人として嫁ぐ花嫁に、夫とその家族を敬うように諭している。

- ・2017/11/29 ウルンブレ村：ヨーグルト作り（フルベ）と藍染め（ソニンケ）

ふたつの民族が共住する村で、それぞれの民族を特徴づける文化が披露された。フルベはヒョウタンの器や乳を攪拌する棒などを使ってヨーグルト作りを実演した。ソニンケは、出来上がった藍染めの織布を砧で叩き、皺を伸ばしたり、光沢を出したりする布打ちの様子を紹介した。

- ・2017/11/29 ハドゥベレ村：鍛冶屋の踊り（ソニンケ）

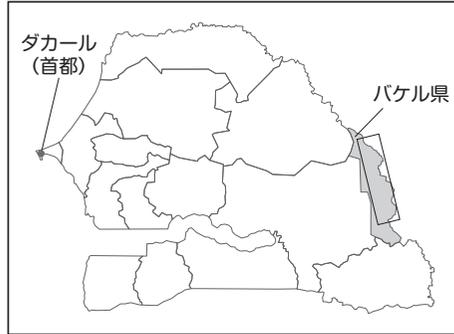
ソニンケ社会では、職能集団は政治や宗教に従事する「自由民」とは区別されるが、火を制御する能力をもつ鍛冶屋は、人びとからある種の恐れと尊敬の念を受ける存在である。男子の割礼をおこなうのも鍛冶屋の役目である。舞台上では同じ身分である「コーディネータ」を歓迎して、鍛冶屋に伝わる踊りが披露された。

- ・2017/11/29 デンバカネ村：結婚式（ソニンケ）

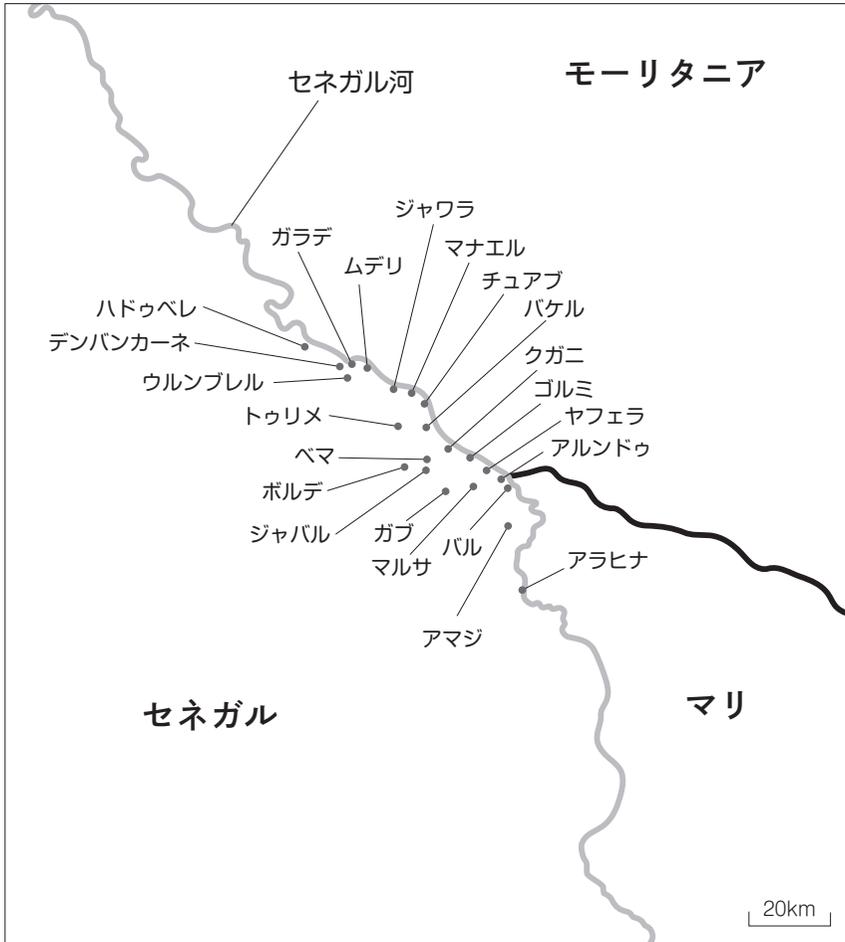
花嫁の嫁入り道具、結婚式の食事、藍染めの織布などが紹介された。

- ・2017/11/29 ユルメ村：結婚式（ソニンケ）

同上



地図1 セネガル全土とバケル県 (筆者作成)



地図2 2017年「文化週間」の開催村 (筆者作成)

3.2 主体者と参加者

これまで言及した「文化週間」のおもな担い手は、火付け役としての地域FMラジオ局、次に舞台の主役となる女性グループ、そして支持者であり行事の顔となった「コーディネータ」である。これに加えて、「文化週間」の証言者として「招待客」がある。ここでもう一度、それぞれの役割を整理したうえで、そのほかの参加者をリストアップする。

FM ジーダはユネスコが掲げる地域ラジオの使命を越えて、「文化週間」の目標に掲げた「民族文化の継承」と「地域の連帯」を切り札として、国家との交渉を狙った地域の力を示そうとしている。その中核にはA氏とともにラジオ局を背負ってきたG氏がいる。「文化週間」の期間中、A氏は本来の意味での調整役であり、裏方に徹して、村々の会場へ移動して舞台の進行を見守る。一方、G氏はニュースアナウンサー、番組の司会者としてラジオ局にとどまり、「文化週間」の報道を担当する。ラジオ局からは中継アンテナと会場で使うスピーカーを積んだ車に、録音やミキシングなどの技術者が同行する。それにラジオ放送を意識して会場の様子を伝える司会者と、舞台を盛り上げる道化役が加わる。

女性グループはすでに述べたように、それぞれの村でおこなわれる舞台の演者でもあるとともに、「招待客」を接待する役目を担っている。行事の実行役を務める女性たちは、舞台では地域住民からの注目を浴び、客を接待することをとおして地域の顔となる

「コーディネータ」の務めは、準備段階での渉外活動と資金援助に加えて、本人は「コーディネータ」の呼称を固守しながらもA氏からは「文化週間」の大会長に仕立て上げられ、会場では主催側の代表として挨拶をする。彼はバスを借り上げ、首都からの「招待客」をそのために建てた大きな自宅に招き、寝食を提供する。接待にはB氏の家族や親戚が駆り出され、食事の支度、清潔な寝床の準備、行水用の水の運搬、都会人のためのミネラルウォーターの購入など、きめ細やかな対応をする。

舞台の進行になくてもならない存在は、グリオと呼ばれる伝統的楽師である。グリオは歴史や文化を語り継ぐことを生業とし、儀礼や祭りにはかならず登場する。通常、グリオ一団は語り部、歌い手、楽器奏者からなる一家族であるが、「文

化週間」には「コーディネータ」に呼ばれたソニンケ出自をもつ単独のグリオたちが全国から集まった。なかには国立劇場の専属楽師もいた。「文化週間」での役割は伝統的なやり方で会場の雰囲気盛り上げることである。

他方、「招待客」のほとんどはソニンケ以外の民族である。B氏は自分の会社を休業にし、多くの社員を引き連れて来る。彼らのほとんどは首都ダカールで生まれ育ち、農村を知らない世代である。またB氏の隣人や知人も招かれる。そして政府の要人、複数のマスメディア、外国人が連なる。セネガル河上流域はセネガルのなかでも「暗黒地帯」と揶揄されるほど遠い異質²⁶⁾な世界であると多民族から認識されている。たとえ仕事でも行きたがらない都会人が多く、まして親類縁者もいないとあれば決して足を向ける場所ではなく、観光などもってのほかである。そのような場所へ都会人を連れて行くという仕組みが巧妙である。政府の要人は、「文化週間」の「箔付け」のためだけに呼ばれるのではない。A氏からの聞き取りによって明らかになったのは、電気も水も乏しい村々の生活や、舗装道路がない地域の実態²⁷⁾を体験して、当地への関心を高めてもらうために連れてこられるのである。年によっては大臣格の政治家が参列することがあり、B氏の働きかけのおかげで、ダカールと地方でおこなわれる二つの行事は政治家が列席する政府公認のものとなった。マスメディアはより効率的に全国に向けて「文化週間」を発信する手段である。2017年にはセネガル国営放送のほか、民間テレビ、地元のケーブルテレビがそれぞれの立場で取材をした。それらの取材はテレビカメラといった専門的な道具を持たず、デジタルカメラの動画機能を使った記録であるが、広域への情報発信と即時性という点で大きなインパクトを持っている。最後に外国人というグループがあり、近接諸国から知人や演目を出すグループ、あるいは活躍中のミュージシャンを招待するほか、関係者の知人が呼ばれたりする。われわれは取材陣の一部という以上に遠来の客という位置づけを与えられ、「文化週間」が外国からの関心の的になる証になった。最後に、各村の女性グループ代表の一団がこれに連なる。彼女たちにとって、他村への訪問は代表としての名誉であると同時に、受け入れ側への表敬の意味もある。

「招待客」は「文化週間」の証人あるいは代弁者であり、また情報拡散の媒体であり、なにより客を受け入れる村の人びとに観られることによる緊張感と意欲を与える。これらの諸要因が相互に作用し行事全体の重要性を高めるとともに、ラ

ジオ局の存続と発展に与している。

ここにあげたすべての人びとがFM ジーダ一行として、開催側が用意したバスや自動車に乗って移動し、村々を訪れるのである。

3.3 行事の進行

村での行事は10年かけてラジオ局が作り上げてきた形式があり、村の関係者との緊密な連絡のもと、滞りなく進行する。FM ジーダ一行は一日に3、4か村を夜中までかけて回った。携帯電話という手段があるにせよ、この日程で行事を実施するのは主催側のみならず、各村での念入りの準備と、「招待者」一行の強靱な体力があってこそ実現可能である。ここで行事の流れを追いながら進行を見てゆこう。

一行を乗せたバスや自動車は伝統的楽師（グリオ）を先頭に連なり、舞台が準備された村の入り口で一端停まり、A氏が会場の準備ができていることを電話で確認したのち、今度は音楽を鳴らしながら村へ入ってゆく。グリオは太鼓を叩き続け、人びとにFM ジーダ一行が到着したことを知らせる。グリオとラジオ局の放送車は先に会場に入りスピーカーや照明を設置し、「道化師」の役割を演じるラジオ局スタッフが自ら踊りながら会場を盛り上げる。そこへほかの一行がゆっくりと歩いて入ってゆく。FM ジーダのテーマ音楽と人びとが連呼するジーダという掛け声のなか、人びとが円になって囲む舞台を一行は音楽に合わせて一周しながら席に着く。最後に入ってくるのは「コーディネータ」のB氏である。人びとはB氏への賛美を込めて、彼の名前を呼び続ける。この一連の動きにおいて、FM ジーダの局長は目立たないしぐさで一行にそれぞれの立場に適した座席を案内し、放送車やグリオに音楽のタイミングや強弱の指示を出し、進行の采配をする。

すべての役者がそろったところで舞台が始まる。司会役はFM ジーダのスタッフである。しかし司会者はそれほど目立って介入するわけではなく、伝統社会に伝わってきた自然の流れで行事が進行しているように見受けられた。司会者が舞台の始まりを宣言すると、まずFM ジーダ側のグリオがマイクを取り開催村の歴史に触れながら村長を讃え始める。それは語りと歌からなる朗読である。これに呼応して開催村のグリオがFM ジーダや「コーディネータ」のB氏を讃える。グリオの演奏者たちは、朗読に合いの手を入れるようにときおり太鼓を叩き、その

たびに人びとの歓声がわき起こる。当然のようにおこなわれるこの儀礼的な応酬が終わると、村長あるいは女性グループのリーダーが挨拶をすることもありますが、これは演目紹介のあとになることもある。

さて舞台の会場が設えられるのは村の一角の広場である。「招待客」にはテントと椅子が用意されている。人びとはゴザや椅子を持ち寄って舞台を取り囲んでいるが、興奮とともに子どもたちが中へ押し入ってくるので、どの会場にも整備係がいて子どもたちを押しとどめる。舞台の中央にシートを敷き砂埃を抑えることもあるが、たいていはときおり水を撒いて砂地を湿らせている。女性グループのメンバーたちは冷えた飲み物²⁸⁾を用意し、一行にサービスする。季節は乾季のはじまりで気温はそれほど高くはないが²⁹⁾、雲一つない炎天下での観劇と舞台進行はどちらの立場にとっても快適とはいえない環境である。冷たい飲料水は都会でこそ容易に口にすることができるが、この地域ではどのように入手されるのか、誰が出費したのかなどといったことに思いを馳せざるを得ない。「招待客」にとっては、同地域の生活レベルやそれを超える人びとによる接待の重みなどを理解するための一端になっているにちがいない。

舞台の進行の合間もグリオが太鼓を演奏し続け、会場の熱気は冷めない。いよいよその日の演目が披露される段になると、演者たちは「招待客」一行が入場したように、観客の輪のなかに太鼓の響きに合わせて踊りながら登場し、会場を一周する。上述したように民族文化の特徴を表現する演目が披露されるのだが、演者の衣服や化粧、装飾品などもそれぞれの場面に相応しい民族や身分を示す独自の意匠が施されている。たとえば藍染めの衣服はソニンケを表象し、口の周りの独特の刺青はフルベ、大きな耳飾りや髪に垂らした金貨などは植民地時代の装束を再現している。演目が終わると、演者たちによる踊りが始まる。地元の観客はむしろこちらの方を楽しみにしているように見受けられ、興奮した観客も舞台の輪に飛び込んでゆく。

セネガルおよび西アフリカ一帯の多くの民族は、それぞれ独自の踊りをもちながらも、踊りの場においては似たような展開がある³⁰⁾。グリオが奏でる太鼓のリズムにのって数人が踊るが、かならずそのなかからひとりだけが激しく踊り出す。するとグリオの太鼓奏者は前に出て、踊り手の興奮を煽るように激しく太鼓を打ち鳴らし踊りは頂点を迎える。そこへ次の踊り手が現れ、腕前を競うように同じ

ことを繰り返す。

「文化週間」の舞台もまた、人びとが日頃親しんできた祭りの場であり、ここぞとばかり人びとは踊り出す。これをA氏は頃合いを見ながら幕引きをするのだが、その前に「招待客」の役割がある。会場の興奮が際骨頂に達すると、「招待客」も舞台の輪に出て踊ったり、ふたたびグリオが登場して朗読したりする。これもまた返礼の応酬であり、それぞれが踊りを披露して感謝と賛美を示す。しかしまた「招待客」は踊ればよいというものではなく、客として相応しい衣装を整えて村々をまわるのである。

舞台の最後は「招待客」側の感謝の表示で締めくくられる。踊りに引き続き、女性グループ連合の会長や「コーディネータ」の挨拶が続いたりするが、それも興奮の度合いによるもので必ずというわけではない。しかし村長が挨拶をすれば、かならずそれに相応する返礼をするよといった具合になっており、シナリオはないが長い間の慣習にもとづいてバランスのとれた応酬がある。

このあいだ、グリオとラジオ局の放送車は音楽を絶やさず、最後にFMジータのテーマソングが流れるなか一行は退場し、人びとは蜘蛛の子を散らすように去ってゆく。

このような一連の流れを映像で記録したが、誰がどの立場なのか把握しないと何が起きているのか理解するのは難しい。とくに踊りは演目の始まりから終わった後までかならずあるため、舞台全体の中心的な位置を占めるかのような印象を与えるが、興奮した子どもや人びとを別とすれば、むしろ儀礼的な性格が強い。

この年の「文化週間」にはわれわれを含めて四つの取材班がいた。セネガルではテレビカメラを嫌う傾向³¹⁾が強いのに反し、FMジータのお墨付きを得ているせい取陣の存在は好意的に受け入れられた。それだけでなく、局長A氏の采配で舞台の進行は会場よりカメラを優先しておこなわれた場面も多かった。人びとは自分たちの村が全国あるいは海外で放送されることに少なからず優越感と満足感を覚えているように見受けられた。

他方、セネガル国営テレビ局は番組制作のために独自のインタビューをしたり、舞台の途中で演目の解説を挿入したり、ところどころで他の取材班の被写体にもなった。狭い空間のなかでお互いが映らないように舞台だけの映像を切り取ることは困難だったが、複数のカメラマンが立っていた舞台こそが現実を映し出して

いたように思われる。

FM ジーダの放送時間中は、放送局に待機したアナウンサー M 氏が中継されてくる音声を電波にのせて「文化週間」を盛り上げる。この放送は、セネガル河を越えて隣国のマリやモーリタニア、ガンビアに届き、インターネット上にも流れる。ラジオ放送ではわれわれ日本の取材班についても報道されたほか、「コーディネータ」とともにラジオ局に赴いてスタジオでインタビューを受けた。

さて一日に3、4か村の取材をおこなう日程上、出向いた先の村で食事をしたり宿泊することもある。しかし先に述べたように、「招待客」と開催村のそれぞれに期待される役割がある建前上、開催村での食事や宿泊もたんに利便性の問題にとどまらない意図がある。前者にとっては、セネガル河上流域の生活を経験することによって地域の実態を知るとともに、ソニンケ社会の活力を証明する代弁者となることが期待されている。また後者には客をもてなす荣誉と行事の主役になるという達成感を与えるものである。

宿泊はFM ジーダの局長 A 氏の目論見のもとに、地域のなかでも生活の不便さを実体験できる村が選ばれているように思われた。実際、われわれが泊ったのは幹線道路から離れた電気も水道も十分に供給されていない村々であった。数十人の「招待客」を受け入れるのはさぞかしたいへんなことだろうと想像したが、どの村でも何の困難もないかのようにことが進んでいった。女性グループのメンバーの家に分宿の手配がされ、蚊帳と清潔なシーツ、行水用の水が用意されて快適な一夜を過ごすことができた。困ったのは取材用の機材を充電できないことくらいだったが、それも A 氏にとっては想定内のことだったと思われる。食事³²⁾のときは一ヶ所に集まり、大鍋で調理された料理がふるまわれた。

3.4 運営形態への考察

すでに述べたように、「文化週間」はFM ジーダの運営費捻出のために生み出された装置であり、ラジオ局は女性グループを組織することによって彼女たちの経済的な自立を助け、「文化週間」という事業の主役を創り出した。「文化週間」や首都ダカールでの大コンサートの開催資金は、ラジオをとおして募っている。かたちとしては、自前の資金ではなく、とくにソニンケ以外の人びとの好意によって実施されているという建前をとっている。

しかしながら、実質的な経済負担は「コーディネータ」B氏の個人的な出資によるところが大きい。B氏がかげで支えることによって、ソニンケ社会の外に向けては建前を前面に出し、「開かれている」ソニンケ社会を演出することにつながっている。逆にソニンケ社会の内に対しては、移民の力ではなく残った人びとの活力を証明することに一役買っているのではないかと推察できる。

実は移民の援助は、A氏の尽力によって移民の妻たちがグループを組織し、経済活動を興こした動きを間接的に後押しするものになっている。というのは、女性グループの経済活動は経済力という面ではまだまだ象徴的なものにとどまり、A氏は開催村の女性グループに若干の資金援助をしているからである。移民からは「文化週間」に対する個別の経済支援はないが、開催村で女性たちが「招待客」を接待するために、移民からの送金が間接的に役立っているからである。

「文化週間」のために全国から駆け付けるグリオたちは無償で仕事をするわけではない。報酬は決して多いとはいえないが、それぞれの事情を加味してB氏が個人的に渡している。グリオはまた人を讃えて歌うことで生計を立てるのがなりわいであるから、村々を訪れるたびに報酬を期待できる。実際、筆者自身もグリオによって讃えられる経験をした。

全体としてみると、経済的には決して多くの利益を生み出す仕組みにはなっていない。それでもラジオ局のスタッフは局長A氏のもとに全力を注ぎ、女性グループも持ち出しで参加し、B氏も経済支援と社会的バックアップを惜しまない。それほどの犠牲をはらっても、地域を活性化する原動力を生み出し、民族と国家を超える地域全体の連帯を掲げるなど、中央政府の関心を引き付けようとしているのはすでに述べたとおりである。また、労働移動の道を選択せずに故郷に残った人たちは、故郷の存続について何らかの使命感を抱き、地域ラジオをとおした文化活動から何かを獲得しようとしている。次章では、局長A氏をはじめそれぞれの立場の人へのインタビューをとおし、彼らのメッセージからもう一度「文化週間」の意義を考える手がかりを探りたい。

4 インタビュー

本章では、先述したように、地域ラジオに関わる様々な立場の人のインタビュー

での語りを紹介する。

4.1 FM ジーダ局長 A 氏

私はフランス国際放送 RFI とフランス国際チャンネル CFI の顧問として、プラ (PRA) と呼ばれるアフリカ・ラジオ・プランにたずさわっています。プラはフランス外務省のプロジェクトで、フランス語圏アフリカの地域ラジオの再建を目的としています。

それ以外に、この場で申し上げるべき点は、私はバケルの地域ラジオ、FM ジーダの代表を務めていることです。このインタビューにお答えしているのは、その立場においてです。

FM ジーダはアブドゥライ・バチリ教授の発案で創設されました。彼自身は政界に入ったため、カフという団体を創り、カフが母体となってラジオ局を立ち上げました。その後、2001年に私が局長に就任した次第です。2009年にラジオ局創設の10周年を迎えました。

セネガルでは地域ラジオで広告を放送すること、そして政治的な活動することを禁止されています。実際は、この二つの部門がラジオ局あるいはメディア一般の資金源になるところなのです。

私たちは厳格にこの点を遵守し、広告も政治色も排除したため、ラジオを存続させるために、資金を得る代替手段を考えなければなりません。そこで考えたのが「文化週間」の開催です。

当初は、「自由を越えて」というテーマを考えました。しかしそれではピンと来ないので、懸け橋という意味を込めて「虹」ということばを入れようとしたのですが、それでも違う。

そしてやっと「とどけ連帯の声」にいたったのです。インターネットで調べてみても、このような名前は存在しませんでした。そこでこのテーマを選んだ次第です。

その理由は、FM ジーダの方針として、マリやモーリタニア、ガンビアなどの周辺地域の連帯を謳っているからです。とくにマリとモーリタニアとはセネガル河の恵みを分かち合っています。この河の両岸には同じような人びとが生活しています。ソニンケやアルプラー (フルベ)、バンバラ、ウォロフなどの民族です。

このような経緯のもとに、「とどけ連帯の声」を掲げる「文化週間」が生まれました。そこには二つの目的があります。

ひとつはラジオ局が自力で発展するのに役立つことです。「文化週間」の期間中は、ラジオ局の庭に特設市を設けます。Tシャツやブーバー（伝統的な巻頭衣）、帽子、時計、眼鏡、スマートフォンのケースなどをジータと「文化祭」のロゴを入れて販売します。人びとはそれらを買ってくれます。その利益からラジオ局は資金を得ることができます。これが一つ目の目的で、「文化週間」はラジオ局が自力で発展する助けになるという点です。

もうひとつの目的は、バケル県が発展することに役立つという点です。バケルはセネガル全体とこの地域の歴史において重要な役割を果たしました。しかし今日、舗装道路の整備をはじめ、医療や教育など、いろんな課題が残されています。解決のための方法は、関係機関の代表や大臣、国会議員、もちろん大統領をもこの地に招待して、彼らに同時代を生きる立場からこの地方の問題や困難を理解してもらうのです。

そしてマリ人やモーリタニア人、ガンビア人を招待します。すでにお話ししたようにわれわれは同じ文化圏で生活しているので、彼らが自国へ戻ったときに、もしラジオ局が存在するなら、同じような方法で地域ラジオを存続させてほしい。たとえラジオ局がなくても、バケルが変化しつつあるように、地域の発展を担ってほしいと願っているのです。

2009年来、「文化週間」をとおして、文化を力にして多くのことを実現してきました。あなた方もわれわれと24か村を回ってご覧になったように、行く先々で人びとはラジオ局の「コーディネータ」に感謝の意を示しました。ラジオ局も「文化週間」の機会に村々に200万CFA.Fに相当する薬を寄付しました。またいくつかの小学校にも援助しました。それらはすべて「文化週間」があってこそできたことです。

「文化週間」を開催するにあたって、バケル市だけで17の女性グループが一緒に活動しています。県内ではそれ以外に30を超えるグループがいます。運営においては食事を担当するグループがいたり、宿泊を担うグループがいたり、各グループが行事のなかで重要な役割を演じています。

資金は、マリやモーリタニア、セネガルから住民の寄付を募ります。それによっ

て人びとが「文化週間」の実現に資金的に参加することができます。

しかし、それ以前に、ラジオ局側ではバチリ教授や「コーディネータ」の B 氏、取締役のアマドゥ・ムフタル・ンブール氏³³⁾、そして私が、それぞれの立場でできることをします。また善意ある人びとがあちこちに、この地方にも海外にもいます。このように「文化週間」は寄付によって運営されます。われわれには「文化週間」を丸抱えで開催してくれるような公式なスポンサーがいるわけではありません。これは住民による住民のための事業です。完全に住民からの献金によって成り立っている文化事業なのです。

またわれわれは村々を回って住民の募金を集め、集まったお金は財務委員会に預けます。財務委員会は知識人によってしっかり管理されています。知識人というのは、たとえ経理を学んだことがなくても、倫理的に立派な人です。そういう人をわれわれは知っています。教養があつて、金銭の管理に長けている人びとです。「文化週間」が終わると、財務委員会は収支報告を提出します。それらすべてを、われわれはラジオで公開しています。

4.2 「コーディネータ」B 氏

コーディネータの役割についてお話するまえにこの「文化週間」の成り立ちについてお話しましょう。われわれはジータという地域ラジオを何年も前に立ち上げました。ジータはカフという名前のソニンケによる団体によって創られました。この団体はラジオ局の基地をバケル置き、2006 年にある NGO の援助でエイズ対策プログラムを実施したおかげで 2 つ目の放送基地をダカールに開くことができました。

二つの放送局はそれなりに機能していました。バケル局は A 氏が管理し、ダカール局もまたカフのメンバーによって運営されていました。しかし、ある時期に資金難に陥りました。すでにご存じのように、地域ラジオは広告から収入を得ることができません。ほかに収入源もなく、唯一の手段が住民から寄せられる計報や結婚などのお知らせです。ご想像のように、お知らせの収入だけではラジオ局を維持することはできません。局は財政的に困難な状況に陥りました。

その時期、私はカフの会計を担当していました。私はダカールに二つの局のメンバーたちを呼び、このような状態のままでは続けられないことを伝えました。

収入源が少ないのだから、何らかの解決策を見つけなければならないことを話しました。その時以来、カフは私を二つのラジオ局を調整する役目の「コーディネータ」に任命したのです。そしてA氏はダカールとバケルの両方の局長になりました。このような次第で、私は二つの局の活動を調整することになったのです。

ラジオ局が存続してゆけるような解決策を見つける必要がありました。すべてのアナウンサーとカフのメンバーを集めて、ジータという名の地域ラジオが存続するための方法と手段を考えました。ジータは地域社会とバケル県全体にとっても極めて重要な存在なのです。

このような経緯があって、A氏がバケルで「文化週間」を開催することを提案してきたのです。最初にこのプロジェクトが実現されたとき、私は正直言ってそれほどの人を動員できるとは思っていませんでしたが、結果として、「文化週間」の成果はラジオ局が自力で活動を続けるのに余りあるものでした。

私個人としては、ラジオ局のメンバーというだけでなく、この地域の住民として、財政的な意味で参加しました。第一回目に私は出席していません。「文化週間」の反響は耳に入ってきましたが、噂話程度にしか思わず、その重要性に気が付かなかったのです。

というのは、30年以上前にこの地域の出身で国会議員になり大臣にもなった人物が、文化週間を開催したことがあったのです。私としてはその程度の企画だったのだらうと思っていました。

バケルのラジオ局のメンバーは私に何かを納得させたくて会合を計画し、私に「文化週間」の名誉大会長として参加することを提案したのですが、それは私が望む役目ではありませんでした。なぜなら、私自身がラジオ局の一員ですから、その立場で後援者的な立場に立つのはおかしいと思ったからです。

実際のところ、後になってから、私は彼らの目的を理解しました。つまり、文字どおり名誉大会長の名のもとに彼らの活動を後援するのではなく、私自身が「文化週間」に参加して、彼らがやろうとしていることをこの目で見るのが重要だったのです。

そして、ちょうどラジオ局創設から10年目の節目に、私は第二回「文化週間」の名誉大会長として参加することになったのです。人びとの参加を目の当たりにしました。ラジオの聴衆、局のアナウンサーたちが一体になって開催した「文化

週間」の規模と影響力に、私は驚きました。こんなことがバケルでできるとは思っていませんでした。

そして、私は三回目の「文化週間」を 2011 年にダカールでも開催することにしました。より多くの聴衆に私たちソニンケ文化の豊かさ、そして何よりバケル県の文化の多様性を知ってもらいたかったのです。これが第三回目でした。

私たちはこのようにして「文化週間」を継続して開催してきました。今年は第十回目になります。それ以来、私自身は「文化週間」の調整役として「コーディネータ」をずっと務めてきました。ラジオ局の調整役は辞めて、「文化週間」の調整役に専念することにしました。

これが私の役割です。具体的には、「文化週間」に関わる活動全体の調整にあたります。文化的なことに関しては企画委員会にまかせ、私は関わりません。むしろ行政的な面を担当します。関係省庁との交渉や、公的な部分での仕事です。文化省をはじめ、会場を確保するためにはスポーツ省などで行政関係の許可を取りつけること、そして、「文化週間」に何らかの手を差し伸べてくれる後援者や共催者を探すことです。これが調整役の仕事です。もちろんすべての活動に目を配ることも怠りません。行事予定は企画委員会が設定しますが、私もなるべく話し合いに参加するようにしています。

「文化週間」の意義について触れる前に FM ジーダが生み出したものについてお話をいたします。

すでにご存じのように、FM ジーダはバケル市に放送基地局があります。バケルというのは三つの国、セネガル、マリ、モーリタニアの 3 か国の国境が接する町です。ですから、この 3 か国にラジオの聴衆がいるわけです。ラジオ局の報道方針は、まず国家間の平和に配慮することです。というのは、1989 年にセネガルとモーリタニアのあいだで、このジャワラ村から発展した痛ましい事件が起きたのです。ラジオ局ができて、私たちは町で起きる事件はよく言われるように風刺画のようなものと理解しました。白と青、赤色の珠があるという話です。二人の人物、あるいは二つの国家に諍いが起きるのは、それぞれが異なった色の珠を、選んだからだと思われまふ。一方は赤がよいと思い、もう一方は青だと思ったのです。しかし実際のところ、どの色の珠もよい珠ではありません。FM ジーダは国家間の平和を報道方針に掲げました。

また国家間や人びとの関係の軽薄化の問題にも触れています。セネガル河の兩岸には同じ民族が住んでいます。ここでお話しをしている私自身、曾祖母は二人ともモーリタニアの出身です。高祖母の一人はマリから来ました。この二つの地域は異なった民族というよりむしろ地域の住民同士の混合から成り立っていて、本来は紛争などが入り込む余地がなかったはずなのです。ラジオ局の創立はそういった地域の特色から生まれたものでした。

そして「文化週間」もラジオ局と同じ方針のもとに考え出されました。私たちは地域の連帯を目指さなくてはならないと主張しました。この事業は連帯すべき地域全体のためのもので、名称がバケル・フェスティバルであろうが、ソニンケ・フェスティバルであろうが、東部地域フェスティバルであろうが、私達の目的は、住民による住民のための住民の連帯です。

「文化週間」が開催されるたびに、いろんな地域から人びとが来ます。マリやモーリタニア、セネガル、ガンビア、ギニア、ニジェールからも、一同に会す友好の場を楽しもうと人びとが集まります。

当事業の目的は私たちの独自の文化を保護するためでもあります。文化的多様性がある国でも、価値観は首都の多数派の民族文化に牽引され、周辺地域の文化は軽視されています。セネガルの今日の状況がそれに当てはまります。首都に住む人びとの文化により多くの注目が集まるのです。「文化週間」の開催には、この点を留保することも念頭にありました。

しかし、セネガルのことだけを取り上げるではありません。今日、西アフリカ一帯には多様で豊かな文化があります。色彩やリズムをとおしてそれらを紹介したかったのです。

実生活の現状も紹介すべき点です。多様な文化が融合しているこのバケルという地域において、フルベやバンバラ、ハスンケなどの異なった民族が、何世紀ものあいだ調和の中で生活しています。「文化週間」をとおして、異なった民族のあいだに存在する友好関係をより強いものにしたと思いました。

このように「文化週間」の意義は複数あります。まとめてみますと、まず文化の保護、文化の多様性を紹介すること、そして住民と文化の力による地域の連帯です。

私たちの夢は、アフリカ大陸の西と東の端に位置するダカールからアディスア

ベバまでのすべての国が一堂に会して「文化週間」を開催することです。すべての国と地域の人びとにとって、異なった文化をともに尊重する社会が可能になることを願っています。

「文化週間」の将来については、私はとても楽観的に見えています。冒頭でお話したように、この事業は A 氏が率先して立ち上げたものですが、私はほんとうにそんなことができるのかまったく信じていなかったのです。しかし実際に参加してみて、私は完全に賛同しました。「文化週間」の成功のためにできるかぎりの貢献をしたいと思い実行しています。

第四回目と第五回目の「文化週間」で、われわれは政府からの含意を得ることができました。ユネスコの事務局長を務めたアマドゥ・ムフタル・ンブール氏を名誉大会長とし、多くの政治家を招待しました。この日をきっかけに、どの年においても、「とどけ連帯の声」を掲げる「文化週間」がセネガル全体の文化行事として認識されるほどに、行政は積極的に参加するようになりました。それは、「文化週間」が文化省のみならず、セネガルの政府諸機関全体から認められたことを意味します。数年前から大統領自身も参列し、関係機関に指示を出して、われわれの活動を支援してくれています。というわけで、すでに申し上げたように、私は「文化週間」の将来をとても楽観的にとらえています。

最後に重要な点をひとつ提起したいと思います。アフリカには口頭伝承の文化があります。われわれは 2017 年の「文化週間」を終えたばかりで、まだその興奮が胸に残っています。歌を聴くと、そこにはすべてがあります。アフリカの歴史を振り返ってみると、人びとの生活はすべて歌をとおして成り立っていたと言えます。私たちが聴いたすべての歌には多くの教えや教訓、価値観が含まれています。今日マスメディアの影響は計り知れないほど大きいものです。グローバル化社会では伝統文化を守ろうなどとしません。いつかわれわれ独自の文化は消滅してしまうでしょう。テレビやインターネットをとおして入り込む別世界の文化によって、われわれの文化は「根こそぎにされている」のです。われわれが多くの価値ある文化資源を失っていることに共感を示す空気も消えつつあります。ある文化が別の文化より優れているなどというつもりはまったくありません。しかし、私たちは独自の文化を持っています。ある種の価値観は再考の余地があると思うのです。

このような次第で、私はこの事業を維持することに尽くしています。それは、私たちが9年来継続し、10年目を実現しようとしているこの「文化週間」の意義と重要性を理解してくれたセネガル政府の支援のおかげでもあります。

4.3 FM ジーダのアナウンサー G 氏

私はバケルの FM ジーダで番組プログラム部門の責任者を務めています。同時に副局長も兼ね、アナウンスを担当しています。

FM ジーダにおける私の役割は、人体でいうところの肺のようなものです。というのは、番組プログラム部門の責任者として、番組表の制作と実施を担当しているからです。番組表の制作に関しては、局長の方針にしたがって、ラジオ局のメンバーとともに作業をします。番組表が出来上がると、それを予定通り実施するのも私の仕事です。毎朝9時に編集会議を開き、ニュース原稿を推敲し、12時と21時半の定時ニュースに備えます。

ニュース以外の番組の進行は私の担当であり、ラジオ局のメンバーと緊密に連携を取りながら予定通りに実行します。FM ジーダは地域ラジオ局なので、資金はとても少なく、アナウンサーや技術者を別々に雇うことができません。そのため複数の能力が求められます。私自身はアナウンサーもしながら技術的なこと、たとえば番組の編集も行います。番組の制作やニュースの内容を決めるのも私の担当です。

以上が私のおもな仕事です。局長からは全権を委任されています。彼自身はほかの機関の顧問も務めており、出張に出ることも多いために、この地域ラジオを運営してゆく全責任を私は担っています。

当ラジオ局は村落レベルから地域レベルに広がりました。2001年にA氏が局長として着任してから、彼の主導でマリ、モーリタニア、ガンビア、セネガルの近隣の村々においてリスナークラブの名のもとにすばらしい住民組織が出来ました。それぞれの国にグループがあります。

今日、セネガルのすべてのFM ジーダ・リスナークラブをまとめた女性グループ連合が結成され、月末に定期会合が開かれています。各グループはそれぞれ小規模な経済活動をおこなって利益を出しています。最初は各メンバーが会費を払い活動資金にあてます。そして、大きな村からは連合へ毎年5万 CFA.F, 小さな

村からは2万5千CFA.Fが積み立てられます。5年間積み立てると、グループはそれを利用してより大きな規模で経済活動を始める権利を得ます。毎月グループの代表は局長の指示でバケル市に集まり、連合の会合に出席します。

私が会合の司会を務めています。また連合に関わるすべての書類を管理するのも私の担当です。グループが商いを始めるときは、2、3人の女性が商品の買付に行き、村のメンバーに商品を分配し、販売するシステムを取っています。今日、各グループはバケル市にある小さな農業銀行へ貯金をしています。以上が各村のクラブの活動です。

バケルに関しては、ここは村ではなく市なので、複数のグループがあります。局長の名や「文化週間」の「コーディネータ」名を冠するグループをはじめ、バケル市在住のマリ出身者のグループ、モーリタニア出身者のグループなどがあります。これら各グループが「文化週間」のあいだ中心になって活動する母体となっています。

どのグループもとても活動的です。多くを求めず、彼女たちが持っていた少ない資金で活動を始めました。もし、何かの機会に彼女たちが資金的なパートナーを見つけることが出来たら、ということをお願いにはられません。ほんの少ないものを頼りに活動を広げた経験をもつ彼女たちは、きっと大きなことを成し遂げられると思うのです。

FM ジーダが開催する「文化週間」は今年で10年目になります。「とどけ連帯の声」がこのイベントのスローガンです。この行事をとおして、私たちの小さな貢献が、地域一帯の連帯に役立つことを願っています。

毎年、「文化週間」にはマリやモーリタニア、ガンビアから、そして海外にいる移民も含めると数十万人³⁴⁾にのぼる人びとがバケルに集まります。それによって私たちの文化が理解され、人びとのつながりが強化されるにちがいありません。

私たちはグローバル化の時代に生きています。昨年、内務大臣が言いました。われわれのような小さな規模の国家は、一国家だけではやっていけない。連合を作るのが重要なのです。私たちラジオ局はその連合をつくらうとしているのです。

すでにお話ししましたように、FM ジーダは地域ラジオ局です。セネガルでは地域ラジオは自己資本をもっていません。出資者もいなければ、可能性のありそ

うな支援者もいません。運営は私たち自身が生み出したものだけで行っています。計報など有料でおこなう通知からの収入しかなく、運営は困難です。おまけにセネガルの電気代はとても高いのです。そのために私たちは「文化週間」を始めました。同時にラジオ局の存在を広め、スポンサーを獲得することも狙っています。私たちが前進するために必要なことなのです。

「文化週間」を始めてから、私たちには希望がでてきました。10年目に当たる今回、セネガル政府から首都ダカールでも開催することが要請されたのです。それによって、私たちの存在が官公庁や各界の重要人物に知られるチャンスを得ました。以上が、「文化週間」について言いたかったことです。

私たちの仕事部屋を紹介しましょう。ここには編集のためのコンピュータをはじめ、500ワットの送信機があります。すべての番組がここから送信されます。ラジオ局の活動についてもここから発信します。

すでにお話したように、FM ジーダは地域ラジオ局で十分な資金をもっていません。局員がそれぞれ複数の仕事をこなしています。アナウンサーをしながら技術的なこともやるというわけです。

しかし、番組を担当するのはラジオ局のスタッフだけではありません。たとえば、イスラームの導師とか、各種団体の代表とか、教師などが番組に出演することがあります。彼らはガラスの向こう側に座り、マイクをとおしてこちらにいる技術者とコンタクトをとります。

一方、ラジオ局のスタッフが番組を担当する場合は、一人でここに座って機械を操りながら番組を進行させます。また複数の人が参加して議論する場合は、司会者は向こう側に座り、別の技術者がこちらにきます。

ラジオ局には10数人のアナウンサーがいます。外部にも7、8人の人が番組を持っています。それぞれ自分の担当の番組の時間にここに来て放送し、終わったら帰るというシステムです。

この機器をとおすと、聴衆が電話をかけてきて、番組に直接参加することができます。明りが点滅すると電話がかかってきたことを知らせてくれます。そしてこちらのボタンを押すと、電話の音が直接ラジオに流れるという仕組みです。一人が終わると左のボタンで回線を切り、別の電話を受け付けることができます。

放送は朝の 7 時半に始まり、13 時まで続きます。午後は 18 時から 0 時までです。

こちらの機器はインターネット接続のためのもので、ディアスポラの同胞たちのために番組をアップロードしています。www.radio-jiida.com でオンライン・ラジオが聴けます。

世界中で FM ジーダのラジオが聴けるんですよ。

4.4 女性グループのリーダーたち

ガブ村のリーダー

グループができたのは最近のことですが、FM ジーダのもとで活動しています。活動のひとつは村の衛生環境を保つことで、みんなで村の公共の場や診療所の掃除をして清潔にするように努めています。もうひとつは商売です。メンバー各自が小さな商いをおこなって、利益の一部を共同預金にしています。将来的には、農業や牧畜プロジェクトにも投資したいと思っています。

ガブ村の副リーダー

私たちはこの活動に大きな誇りと意欲を持っています。私たちの活力が活動を支えています。清掃活動のときはみんなが集まります。しかし商売の方はまだまだ小規模で、まとまった利益を出すことができません。FM ジーダは協力してくれますが、私たちの農業プロジェクトを実現するにはもっと資金が必要です。そのような援助してくれるパートナーを探しています。

マンジュンダハ村のリーダー

私たちは、伝統的な装いで「文化週間」に臨みました。編み込みの髪型、髪飾り、耳飾りはソニンケ女性に特徴的な装いです。女性は食事を整えると、きれいに着飾ります。夫や家族に料理を出し、みんなが食事を終えると子供たちが遊ぶのを眺めながら、夫のそばに座っておしゃべりをします。

FM ジーダや B 氏、報道陣など、みんなが一緒になってこの地域のことを考えてくれています。子供たちも関心を持たなければなりません。私たちの演目とおして、食べるのがいかに大変な準備を必要としていたかをわかってほしいの

です。そして「文化週間」の開催の意義を理解して、将来のために責任ある行動をとれるように願っています。

今は製粉機があるおかげで、便利になりました。製粉機はみんなでお金を出し合って買いました。数人の仲間が集まって定期的に決まった金額を出し合い、順番にひとりがその総額を使います。そのおかげで、みんなのために何かをしたり、あるいはそれぞれが自分にあった経済活動を始めることができました。小さな商いをする者もいます。今は共同でミシンを導入することを考えています。ここでとくに申し上げたいのは、わたしたちがグループを組織して活動することができたのは、FM ジーダのおかげだということです。

4.5 ガブ村の村長 S 氏

私は 1970 年の 12 月に 23 歳で村長の役につきました。村の起こりは 1733 年なので、私は 8 代目の村長になります。まずトゥクラ（フルベ）、バンバラ、ソニンケのそれぞれの民族の代表からなる賢人会を立ち上げました。賢人会は私のサポート役でもありながら、若い村長を監視するという立場にありました。彼らのおかげで私は村長としての第一歩を踏み出すことができたのです。一人でやれるまでに 5 年かかりました。この機会にあらためて彼らの支援に感謝の気持ちを表明したいと思います。賢人会は若造だった私にはとても有益な存在でした。

村の住民のあいだにはある種の共感というものがありました。私の役目はそれを強化することでした。異なった民族がともに住むこの村には、連帯の意識もありました。フルベやソニンケ、バンバラのあいだでの結婚もあり、われわれはひとつの血でつながっています。村長になってから、困難を感じたことはほとんどありませんでした。裁判所や警察へ行くような必要もなく、問題が起きても村の中で解決してきました。神に感謝するのと同じように、住民にも感謝しています。人びとは心を開いて私のことばを聞いてくれます。

質問：ガブもこの地方の他の村々と同じように出稼ぎ労働が盛んなところですね。出稼ぎという現象を踏まえて、村の将来をどのように考えていますか。

答え：現在のところ、ガブからは 400 人余りの移民がフランスをはじめスペインやアメリカなどへ行っています。移民は共同で村に援助をしてくれています。ガ

ブ移民が多く住む地域の市長は毎年、ここを訪れます。移民の同郷人会は外国でも公的に認められ、開発援助の重要なアクターになっています。

質問：移民は将来においても変わらず重要な存在ですか。

答え：そのとおりです。フランスでは移民の同郷人会は移動先の居住地でパートナーを見つけています。たとえば、パリ近郊のマント＝ラ＝ジョリの例があります。ガブの小学校の2クラスはマント＝ラ＝ジョリの人びとの援助で建てられました。今は塀を作っていますし、もう2クラスが増設される計画です。

移民は村全体のことを考え始めてくれています。以前はお金が貯まると牛を購入していましたが、牛は盗まれたり病気になったり不安定な財産です。今は移民が村のために多くのことをしてくれます。マント＝ラ＝ジョリの市長がまた来る予定になっています。過去にも2回来てくれましたが、そのとき話にあがったプロジェクトを実行に移すために来る予定なのです。

4.6 帰還移民 D 氏

私は40年以上をフランスで移民として過ごしました。この村の大きな変化は私が出発する前から始まり、私がフランスにいるあいだにも進みました。文化的にも、社会的にも、環境面でも大変化があったのです。この変化には神に感謝しています。同時にわれわれの先陣となった移民の仲間たちにも感謝しています。彼らは村の変革に大きな貢献をしました。村の発展、そして地域の発展にも力を注ぎました。移民は大きな貢献をしたのです。

私がフランスへ出発する以前、先ほどお話ししたように40年以上前のことです。村には教育や医療をはじめ多くの分野で問題がありました。大きな変革があったものの、まだまだ課題は残されています。住民だけで解決できることではありません。われわれは政府の援助を期待しています。われわれが今日よりも前へ進めるように、国際機関との協力も願っています。今日の状況はまだ満足できるものではありません。とくに教育や医療の面では、やるべきことがたくさんあります。

フランス渡航後は最初にネスレ関連のダイエット食品工場で働きました。ネスレは世界的に知られたスイスの会社です。この会社で5年間働きました。次に治

金関連の会社に入り電気溶接を担当しました。ここで2年間勤めた後、商業施設に就職しました。パリのレピュブリック広場にあるマガザン・レユニという店で伝票係として3年間、働きました。その後、その店を退職し、パリ市役所に職を得ました。そして、それが生涯の職業になり、2015年9月に退職するまで勤めました。

退職後は、ジャワラ村に戻りました。これまでの人生の休養を取りたいと思い、家族と一緒に過ごしています。生まれた土地に戻るというのはすばらしいことです。故郷に戻ってきたことは大きな喜びです。

もちろんフランスに若干の郷愁もあります。フランスで長い年月を一緒に過ごした友人や仲間を思い出すとなつかしい思いでいっぱいです。しかし彼らとはいつも新しいコミュニケーション手段を使って連絡をとりあっています。おかげでまるで一緒にいるような感じです。私からも向こうからもいつも近況を知らせ合っています。

今のところ、私は特別な活動に従事していません。むしろ休養しているというてよいでしょう。そして考え中です。仕事で積んだ経験を活かして、村に帰ってきた仲間や、ここにいる人たちと何かできることはないか考えているところです。できれば、社会的な分野でヴォランティアとして何かしたいと思っています。外国生活で習得した小さな知識を活かして、何かを前進させることができればよいと思います。

FM ジーダの理念はとてもすばらしいと思います。始まってから10年になります。村々を巡回する方式は4年前から続いています。皆さん方がそれぞれの村でご覧になったとおりです。注目すべきなのはFM ジーダが有名になったことです。他の民間ラジオ局のなかでも強い人気をもつラジオ局になりました。

しかし、ラジオ局が有名になったり、経営難に陥らないことだけでは十分ではありません。彼らがやっていることに応じて、住民が何らかの恩恵を受けることが必要です。みなさんは20か村以上の村を訪問しましたよね。各地で多様な文化に触れましたよね。私はそれらが異なった文化であるとはいいたくありません。たしかに異なるものはありますが、ひとつの文化として語るができるものです。それらはどれもとても興味深いものです。私が望むのは、住民が紹介した芸術や職人技術などすべてについて、この「文化週間」をとおして、それらの真価

が再認識されることです。そして、行事を準備する人びと、客を接待する人びと、移動して村々を訪れるすべて人がその恩恵を受けることです。

ご覧になったように、この地域にはまともな道路がありません。さきほどお話ししたように学校や病院も十分ではなく、インフラ整備もはなはだ遅れている状態です。FM ジーダや「文化週間」のためにいらしたあなた方は、日本からの大使だと思っています。みなさんにはわれわれが求めていることを日本政府に伝えてほしいと願っています。JICA はセネガルに多くのことを実現してくれました。セネガル人はそのことをよく知っています。世界は複雑だということもよく知っています。しかし日本はそういった困難を乗り越えて何かしてくれるのではないかと思うのです。日本人は世界がどのように動いてゆくのか、よく知っているはずです。

第三世界に援助しようという国は、この国に自由に投資できることをわかってほしいです。セネガルに援助しようと思うすべての国や機関にこのメッセージを伝えたいです。われわれはセネガルをあらゆるパートナーに開放したいと思っています。住民だけではセネガルを発展させることはできません。われわれは国や NGO を始めあらゆる方面からの援助を必要としています。セネガルに援助してくれるパートナー、アフリカに援助するパートナーがほんとうに必要なのです。

みなさんは世界で何が起きているかよくわかりでしょう。世界にあるのは惨めな現実です。そのために人びとは西欧に行こうと無防備に海に飛び込んだりしています。しかしこの大陸は十分、生きてゆくに値する場所です。この国も同じです。しかし資本が乏しい、投資はなされない、銀行は起業したい人の要望に応えない。これらすべてが発展を妨げる障害なのです。

個人が自分の居場所で平穏に分相応に生きるための援助は、グローバル化された社会ではあらゆる方面から可能なはずです。

移動の自由も重要な課題です。若者は行きたい場所へ行き、また戻ってくる過程で新しい知識を獲得したり、アフリカと他地域の違いを学んだりすることができます。これはとても重要なことです。もし若者が一か所に押しとどめられてしまったら、偏った情報だけが耳に入り、若者の流出を増加させてしまいます。若者は重要な働き手です。われわれには土地があります。水があります。われわれの元には発展するためのたくさんの可能性があります。しかし若者を自由にさせ

ないことによって、あらゆる障害が生じてくるのです。

長くなりましたが、私がお伝えしたかったことは以上です。

4.7 小括

「文化週間」の主要アクターへのインタビューからは、それぞれの立場から異なる現実が見えてくる。A氏はラジオ局の存続の仕組みを創り出したことへの自負心があり、「文化週間」の運営が住民からの献金によって成り立っていることを強調する。しかし、村々への寄付や女性グループへの資金援助をおこなったり、全体の運営資金を調達したりするために、現実にはB氏を筆頭とする大型の寄付金がなくては不可能である。B氏はインタビューのなかでその点にことさら言及することはなかったが、個人的な場での聞き取りによると、彼にとっては「大したことがない額³⁵⁾」の資金援助をしているとのことだった。

中央政府への意識は、上述の両氏と副局長兼アナウンサーのG氏では若干の温度差があるように感じられた。G氏のことばからはむしろ日々の放送作業や女性グループの具体的な活動の様子が伝えられた。またラジオの電波が届く地域一帯への共感もあり、「文化週間」の意義を地域で仕事をする生活者の実感としてとらえている。

「文化週間」の実施を担う女性グループにとっては、とうぜん舞台の演目内容に大きなメッセージを込めているが、それ以上にFMジージダとの関わりのもとでおこなっている経済活動が重要な関心事である。経済的な支援を期待する気持ちもあり、A氏が作り上げようとする地域自立型の経済の一翼を担っている自覚はあまりない。しかし気が付かないうちにFMジージダをとおして外部との接触の表舞台に乗せられ、その借りによってFMジージダの熱心な支持者になっている。

他方、「文化週間」の開催地のひとつの村で村長を務めるS氏は、複数の民族が共生する村の実態に「文化週間」の目的を重ね合わせているが、地域と生活の場を自分たちで作り上げようとするラジオ局への共感は薄いように見受けられる。むしろ従来型の移民を中心とした地域開発を念頭に置いている。

帰還移民のD氏はB氏の兄にあたる。FMジージダへの理解と「文化週間」の理念への賛同を示しているが、引退の身分にある自分が自らその実現に向けて力を注ごうという意味はない。一方、彼のことばからは職人身分が継承してきた民族

工芸や文化への正当な評価を望み、職人身分が敬意を受ける存在であることが遠慮気味に発せられている。

5 考察

全体をとおして浮かび上がってきたのは、政治力や宗教的な影響力を持たずに「文化を力としながら国家と交渉する民族」の姿である。そして、これまで注目されてこなかった「海外に出ることよりも残ることを選択した人びとの生活戦略」が明らかになり、そこには「伝統社会の変革」の兆しを見ることができる。

冒頭で整理した四つの課題のうち、本稿では第三の「民族文化を披露する意義と運営形態」をめぐって検討を試みてきた。開催側の究極の意図は、文化の力で中央政府による関心を引きつけて地域の開発を促すことに拡大した。そこへ到るまでの過程では、ラジオ局の存続という喫緊の課題に端を発し、ラジオ局の主導による女性グループの組織化と経済活動の展開を経て、異なる主体者と参加者がそれぞれ複合的かつ重層的に役割を演じるなか、女性グループが「文化週間」の主体になっていった。また偏見の目を向けられていた民族文化を逆手にとって、緊張関係にある国境地帯の諸民族を「とどけ連帯の声」というスローガンのもとに「文化週間」に巻き込み、エスノセントリズムととられかねない一民族による文化活動の様相を巧みに回避し、地域という現代的な対象を表面に押し出すことに成功した。A氏によるこれらの活動は広大な構想力をもとに大胆かつ巧妙に実行されたので、とうぜんの結果として中央政府の関心を引くことに成功した。また「文化週間」の開催にあたっては政府による政治的な支援を得ることもできた。

はたして、このようなシナリオを政治力や宗教的な影響力を持たずに「文化を力としながら国家に交渉する民族」の姿として脚色してよいものだろうか。あるいは移民の出身村への共同投資の陰で注目されてこなかった「海外に出ることよりも残ることを選択した人びとの生活戦略」と解釈することができるだろうか。どちらも現実の一部を照らし出すと同時に恣意的な現実認識になりかねないが、現時点での留保された結論ではある。

敢えて恣意的な見方をすれば、これがソニンケ民族による文化活動を隠れ蓑にした政治運動であるという解釈をすることもできる。インフラストラクチャの整備においてはたしかに後発地帯であるが、地域一帯における今日の生活の質を鑑

みると十分な富の蓄積がなされてきたといえる。したがって経済力において競う必要性はない。彼らが口にする国家に求めるべき舗装道路や電気の整備さえ、民族の資本を集結すれば可能なのではないかとさえ思えるのである。したがって、行き着くところは政治への発言力になる。ガーナ王国滅亡以来、何世紀ものあいだ政治権力を持たずに経済力で他を凌いできた民族が、21世紀になって何を求めているのか単純に押し量ることはできない。たとえその何かがあったとしても、それは「文化週間」の運営があたかもひとつの手段でひとつの目的のもとにおこなわれているかのように見えても、実際は多方向に向かったベクトルが入り組んでいるように、その何かは一様ではないはずである。観察者の目に見えることはごく一部に過ぎないが、A氏が地域出身の歴史家であり政治家のバチリ氏に傾倒していることはひとつの脈流として意識してもよいかもしれない。またA氏とB氏の関係性と「文化週間」に求めるものの違いが、将来の道筋を決定づける可能性もある。

では二つ目の仮定に設定した「海外に出ることよりも残ることを選択した人びとの生活戦略」という点はどう評価できるだろうか。ソニンケ社会の男性は、預言者ムハンマドの人生を模範として、古来、移動して商いを営むことに価値観を抱いてきた。それは生計を立てる手段である以前に、人生の通過儀礼とみなされた。フランスをはじめとする先進国への労働移動であっても、出てゆくことへの憧れは消えず、多くの男性を外の世界へ駆り立てた。そのなかであって、出てゆかない選択には別の強い意志を必要とした。国外で財を成すことも、不安定な立場に陥ることもない代わりに、地道に働く以外に立身出世の道はない。「文化週間」を支える人たちはみな、そのように暮らしてきた。国内で富豪といえる経済的な地位を勝ち得たB氏でさえ、そうした道を経てきたのである。そういった側面から「文化週間」が残った人びとによる故郷への事業ととらえるのはあながち見当違いではない。ソニンケ社会で長年にわたって調査を続けてきたが、移民を中心にさまざまな現象を見てきたきらいがあった。送り出し社会の変容も移民による影響ばかりを考慮してきた。そうしたなかで、残った人びとに焦点をあてるのは、とうぜんすべき作業であった。

そのとき重要な視点になるのが、残ったという条件以外に想定される変数である。たとえば、FM ジーダは残ることを選んだ男性によって設立され、もうひと

つの残った人びとである移民の妻たちを動員して活動を拡大した。はたしてこの構図は、出て行った人对残った人という範疇に収まるものなのか。あるいは出てゆくことができなかつた要因が、たんなる意志の問題ではなく、経済的条件や社会的制約である可能性も否定できない。女性はその両方をまたぐ立場にあるが、それ以外の要因も検討する必要があるし、男性に対しても同様である。これらを詳細に検討してゆくと、社会身分や貧富の差などの序列が大きく変わる可能性のある「伝統社会の変革」がより明確に姿を現してくる可能性もある。

このようなより細部への考察を展望するとき、やはり表象された民族文化そのものの内容を吟味せずには語ることはできない。本稿では詳しく立ち入らなかつた演目の内容が、今後の作業の有効な材料となる。

「文化週間」の映像取材から、みんなくビデオテーク番組やみんなく民族映像誌第34集『セネガルを越える人と地域ラジオ』としてDVDを製作した。DVDに収録した『ただいまオンエアソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ』（長編）は5日間に渡った「文化週間」の記録と全体像である。同名タイトルの短編番組は、主体となって「文化週間」を運営した地域ラジオ局に焦点をあてている。あとふたつの短編はそれぞれ、主体者として活躍した女性グループとグリオを取り上げたもので、『私たちが主役 ソニンケの文化週間を支える女性たち』と『グリオは語る 今と昔をつなぐなりわい』という番組になっている。そのほか2000年に取材した『パリ～ダカール～ジャワラ セネガル・ソニンケの出稼ぎ社会』も収録している。

5日間の記録をひとつの番組にまとめ上げるとなると、各村の演目の始終を収めることは不可能で、映像と音を中心とした「文化週間」のハイライトを取り上げたかたちになり、膨大な情報が切り捨てられてしまった。今後の課題としたいのは各村で取材した一部始終を検討することである。しかし一字一句にいたる内容の把握には限界があり、ソニンケ語やフルベ語、バンバラ語の話者の助けが必要になる。そのために映像資料を材料として、現地や海外の人びとと情報を交換し合える場をインターネット上で設けることができればと考えている。たんなる翻訳の場にとどまらず、演目の社会的意味や背景についての情報を話題としながら、みんなくで進行しつつある「フォーラム型ミュージアム」の構築に貢献することを目指している。

6 おわりに

本稿は映像で記録した「文化週間」について、映像では説明しきれなかった情報を追加するとともに、異なる主体者の役割と地域の社会経済的な状況に留意しながら民族誌の観点から記述し、行事の成立要因や意義、背景を考察した。そのなかで地域ラジオの役割は大きいものの、国際機関の主導のもとに設立した地域ラジオの位置づけから現象を分析する姿勢には違和感があった。なぜなら、コミュニケーションの民主化や、市民権へのアクセス、開発へ影響を与えるなど、地域ラジオに与えられた責務に沿って検討することは、基準にそった評価にすぎず、現実を映し出すには不十分であったからである。他方、これまでの自らの研究の路線上から想定した、富を蓄積した移民による文化への投資を威信財と捉える視角もまったく見当違いであったことがインタビューから明らかになった。その結果、さまざまな主体から見える様相を重ねて見ることによって、現象の今を記述し、対象社会に潜在する兆しのようなものを見出す作業になった。それは第5章で記述したとおりである。

しかし、本稿で除外してきた視角がより現実を際立たせる時期が来るかもしれない。それは学問領域の問題というより、現象の状況と現実に向き合う姿勢によるものである。たとえば、マクロな部分に視点を転じれば、国際機関や特定の国による援助を受けながら各局を統括する立場にある地域ラジオ連合³⁶⁾は、国内の活動において求められている独立性や民主性などを保てるかどうかという問題が浮上する。あるいは、「文化週間」の国内外への波及は何をもたらすだろうか。また民族社会からの観点では、移民の富という課題が宙づりである。共同投資による村落開発の時期は終わり、個人の富の行く先がまだ見えない。女性グループの活動は有機的に「文化週間」と結びついているが、経済的自立や自己実現という点ではまだまだ不十分である。彼女たちが思い描くグループ活動の将来は、どこに向かってゆくものなのか。そしてB氏の献身的ともいえる「文化週間」への関わりは、彼に何をもたらすのかはきわめて大きな疑問であり、民族社会全体の将来にかかっているような兆しを感じさせる。

今後の課題のなかで、セネガルの地域ラジオの諸事例や、セネガル地域ラジオ連合の動向、国際機関、諸外国による介入の動きは無視することができない。そ

のなかから、外部から設定されたラジオではなく人びとにとってのラジオの役割も見てくるだろう。また民族運動という観点からは、セネガル国内の他民族による文化活動の実態や、隣国マリでも開催されるようになったソニンケ国際フェスティバルの動向などにも注目してゆく必要がある。そして本論の継続としては、故郷に残った人と出た人を区別する諸要因に留意しながら、「文化週間」によってにわかに注目されるようになった民族文化の意味を、記録映像に残る文化表象の詳細を現地の人と一緒に考察する作業のなかで探つてゆきたいと考えている。

注

- 1) みんなく民族映像誌第 34 集『セネガルを越える人と地域ラジオ』
- 2) 主催側はこの行事をフェスティバルと表現することもあるが、日本語の語感にはそぐわないうえ、かといって民族祭と意識するのも本来の意味を損なうため、主催側が公式に使用している名称をそのまま翻訳して「文化週間」とした。
- 3) 伝統伝達者、語り部、吟遊詩人などという呼称もある。
- 4) フランコフォニー国際機関 (Organisation Internationale de la Francophonie, OIF) は OIF によると、加盟国のあいだで政治、教育、経済、文化面における協力と開発を住民のためにおこなう国際機関であるとされる。前身の文化技術協力機構は旧フランス領の指導者たちが中心になり 1970 年にニジェールのニアメで設立された。
- 5) www.unesco.org/new/en/media-services/single-view/news/la_radio_communautaire_favorise_le_developpement_local_a/t/ (2019/12/10 閲覧)
- 6) *Les moyens de communication communautaires: Le rôle des media communautaires. Le Développement No.90* (série Etudes et documents sur la communication) (Frances Berrigan 1981), *Le rôle des médias en zones urbaines* (Peter Lewis 1984), *Rapport final du Conseil intergouvernemental du Programme international pour le développement de la communication* (Dixième session) Paris, 7-13 mars 1989 (UNESCO 1989) などが相次いで出版された。
- 7) たとえば Adjovi (2007) は *Agriculture* というインターネット上のジャーナルへ投稿された記事で、地域ラジオについてのアフリカのさまざまな例を取り上げて、コミュニケーション論から端的かつ包括的に分析している。
- 8) 本稿で対象とするのは、ソニンケが勢力をもっていたギディマハ、ハイレ、ガジャガ、ジャフス、ジョンボホ、ティリングなどのなかでガジャガの名で人びとの記憶に残る地域である。
- 9) ソニンケの経済的繁栄は、ガーナ王国時代にこの地を訪れたアル・バクリ (Al-Bakri : 11 世紀) やアル・イドゥリシ (Al-Idrisi : 12 世紀) などのアラブ人の旅行記に記され、西欧諸国によるアフリカ進出の時代においてもソニンケは大商人の異名で知られた。その後、労働移動の時代を迎え、その栄光は忘れ去られ、労働移動の背景にあるとされた貧困だけが注目されたが、歴史家のマンシュエル (Manchelle 1997) によって、ソニンケ社会が比較的繁栄した経済状況にあったことが検証された。
- 10) ソニンケ商人の歴史については三島 (2007)、現代のアジア・アフリカ間貿易については三島 (2002c)
- 11) マリ北部紛争 (2012 年) は、中央政府から独立を求めるトゥアレグ族がマリ北部の 3 都市を占領し、この独立派占領地をイスラーム原理主義勢力が乗っ取り、そこへ諸外国やイスラーム勢力が介入して入り乱れた紛争。その後も抗争が続き、国内は不穏な情勢が続いている。
- 12) BATHILY, Abdoulaye, *Les portes de l'or: Le royaume de Galam, Sénégal, de l'ère musulmane au temps des négriers, VIIIe-XVIIIe siècle*, L'Harmattan, 1989, Paris. バチリは 8 世紀から 18 世紀までのソニンケによるガジャガ王国の盛衰についてオーラルヒストリーをもとに記述した。
- 13) 民博の「平成 29 年度情報プロジェクト」として、カメラスタッフ 2 名とともに 1 週間の映

- 像取材をおこなった。この年は「文化週間」の10年目にあたり、首都での記念行事の日程が離れていたため、セネガル河上流域で開催された行事のみを取材した。
- 14) この考え方がまったく当てはまらないわけではなく、「おひねり」を出す立場として舞台上上がって、紙幣をばらまく移民もいた。しかし、このように突出して目立った振る舞いはあくまでもひとりの個人的なものであり、全体の運営とは関係がなかった。
 - 15) セーファー・フラン (CFA.F) はフランスの旧植民地で通用した通貨名称“Colonies françaises d'Afrique” (アフリカのフランス植民地) の略であったが、同じ綴りを利用して現在では西アフリカでは“Communauté financière africaine” (アフリカ金融共同体)、中部アフリカでは“Coopération financière en Afrique centrale” (中部アフリカ金融協力体) の略とされている。日本円との換金率はユーロに連動して変化するが、およそ1円 = 5,4 CFA.F (2019年11月11日現在)
 - 16) 実際は偽チケットが出回って、チケット収入は250枚分にとどまった。
 - 17) サービスの交換が人びとの関係を規定する例として、ここではAがB氏の頼みを受けて海外から駆け付けるという代償に対して、将来訪れるかもしれないAの経済的困難や病気の不安がB氏によって保障されるなどの既得権が暗黙の了解として存在する。
 - 18) セネガルの多くの地域ラジオが運営上の困難を抱えていることがダカールのユネスコ事務所によって指摘されている。
 - 19) 憲章では、地域ラジオは地域の開発のためにあることがうたわれている。そして(1) 独立した組織であり、(2) 宗教色をもたず、(3) 市民のためのラジオであり、(4) 民主的であり、(5) 文化的であることが定められている。
 - 20) 住民参加型の開発援助はイギリスの開発学研究者ロバート・チェンバース (Robert Chambers) が提唱し、1980年代頃から世界的な傾向となり、セネガルでも住民の組織化が進んだ。しかし住民を丸ごとしてみる組織化は開発プロジェクトの失敗につながり、その経験から身分や立場を考慮した組織化がおこなわれるようになった。とくに農村社会で発言権をもたない女性は、住民組織が享受する援助の対象とならないことが問題視され、女性グループの組織化が活発になった。セネガル河上流域の諸民族における社会身分の区別を考慮すると、女性全体を対象とすることにも限界があり、開発プロジェクトはなかなか功を奏するにはいたらなかった。その後、海外からの援助は自立支援型に移ってゆくが、フランスによる移民の帰還支援も重なって、個人への投資に切り替わっていった。FM ジーダの局長A氏が女性グループの組織化を構想したのは、地域一帯で援助活動がおこなわれていた過去の事例を意識したものだったと思われるが、男性不在の移民送出社会における聴衆者の多数を占める女性のリスナークラブの設立がきっかけである。その後、経済活動を共同で営むグループに発展してゆくが、メンバー構成をみると同じ社会身分の出身者からなっている例が多く、人数も限定されていることが見えてきた。A氏自身が助言をおこない統率の一翼を担っているだけで、開発援助につきものの資金の投入はない。その点において、開発援助の用語として使われる女性グループとは一線を画するが、本論ではリスナークラブが成長した別の組織であることを示すためにあえて女性グループという表現を用いる。FM ジーダ側では、従来のリスナークラブの呼び方を継いで「クラブ」と呼んでいる。
 - 21) 直訳すれば「連帯の電波」になるが、標語なのであえて「とどけ連帯の声」と意識した。
 - 22) 1960年代末からサヘル地帯を襲った干ばつは、世界の先進諸国からの援助という名の介入のきっかけとなり東西冷戦の舞台をアフリカに作り出した。それは今日の紛争の萌芽を生み、難民を作り出している原因となっている。アフリカに植民地を持たなかった合衆国は世界銀行を中心とした国際機関での発言権を伸ばし、干ばつとそれによる独立国家の困窮を救うために「構造改革」という名の融資を主導した。旧宗主国のヨーロッパ列強諸国は欧州開発基金をとおした援助によって旧植民地への影響力を維持しようとした。フランスはその筆頭に位置し、同組織の議長の座を長期にわたって占めた。
 - 23) ソニンケ社会では、支配者や戦士、イスラーム伝道師の家系に属する「自由民」とそれ以外の身分が区別されている。「職能集団」には革職人、鍛冶屋、木工、織工、楽師などがあり、ソニンケ社会の正式な構成員として認められているが、特定のリネージュの「自由民」と労働とサービスの交換で結びついている。「奴隷」や「旧捕虜」は、諸王国の興隆と戦争の時代の戦利品として多民族から連れてこられた出自をもち、そのほかの身分への労働提供と引き換えにある種の保障を受けていた。奴隷や旧捕虜は1903年と1905年の政令で正式に開放されたが、このような社会身分の区別は今日でも婚姻や社会進出などの面で根強く残っている。

- 24) コメは植民地時代に輸入され、のちに灌漑の導入によって乾燥地帯での栽培も可能になったが、むしろ容易に安く入手できる輸入米や援助米によって人びとの食生活は大きく変わった。
- 25) 脱穀した穀物（トウジンビエやモロコシ）を製粉し、そのあと粉に少々の水を加えながら細かい粒になるまで手のひらでかき混ぜる。これがクスクス料理のもとになる一種の Pasta であり、ソースをかけて食する。この地方では、ニューベという豆の葉やバオバブの葉を切り刻んだものを燻製の干魚で煮込み、落花生ペーストを加えたソースが一般的である。河で獲れる魚を加えたり、発酵乳をかけたりすることもある。
- 26) 800 キロメートルという距離の隔りだけでなく、都会での共通語となっているウォロフ語が通じない地域であること、内婚制で他の民族と交わる傾向が少ないという閉鎖性などが、同地域とソニンケ文化への偏見を生んでいる。
- 27) セネガル河上流域は移民からの共同投資のおかげで、どの村にもモスクや学校、診療所が整っている国内でも稀な地域である。人びとの生活は比較的豊かであり、個人の家々も新築され、乾燥した土地に囲まれた生命の存在感に乏しい景色と都会からの距離を考慮しなければ都会並み、あるいはそれ以上の生活がある。ただ、舗装道路のような巨額の費用がかかる事業は村レベルで成し遂げられることではない。実際の移動は、整備された 4 輪駆動の自動車でも丸 1 日かかるし、タイヤがパンクしたりするのは日常茶飯事である。未舗装の砂地を走ると、旅行者は体中砂だらけになる。電気は次第に普及しつつあり、電線を延長したり電気メーターを購入するところまでは村レベルでおこなわれているが、住民にはメーターを設置する権限がないために使うことができない例もある。水は移民が深井戸を作り、共同水道までは設置することができたが、各家庭への配水は個人の財力に任されている。しかし深井戸そのものの水量は十分ではなく、人びとは従来型の井戸も使用しながら、水瓶に汲み置いて水を使用する。
- 28) どこへ行っても井戸水ではなく、ビニル袋詰めにしたミネラルウォーターや瓶入りや缶入りのジュースがふるまわれた。自分たちの商業ネットワークをとおして豊富に商品が運ばれてくるようになり、このような飲料水は容易に入手できるようになったが、日常の食料に比べると安いものではない。地元の観客は、プラスチックの蓋つきバケツで運ばれてくる水を大きなコップで飲みまわしているの、都会や外国からの客に配慮してのことだと思われる。冷蔵庫は村の雑貨屋が所有していることが多いがどの村にもあるわけではなく、電気がないところではガスボンベで動く冷蔵庫が使用されることもある。
- 29) 同地域の 11 月の平均気温は最高 38℃、最低 33℃。雨は降らない。
- 30) 数か国における複数の民族についての筆者の観察による。
- 31) 今日、衛星放送のおかげで国内にいる人も海外の番組を見ることができ、海外にいる同胞も自国の情報をテレビから入手することができる。しかし、海外のテレビ取材によって意図しないかたちで映し出された現実が人びとの感情や名誉を傷つけた経験が社会的認識になり、一般的にはカメラには拒否感情をもつ人びとが多い。2000 年におこった民博の映像取材ではそのことを強く意識させられた。
- 32) 客にはごちそうを振舞おうと、その日のために牛を屠殺して料理が用意されることが多かった。その結果、どの村でも牛肉の炊き込みご飯や Pasta が提供された。牛は家畜のなかでもいちばん高価で、コメや Pasta の料理は在来の雑穀を使ったクスクス料理よりも都会的であるとされる。ミネラルウォーターは都会人や外国人に衛生面で安心感を与えるが、それ以外にもジュースが提供されたりした。客にとっての滞在体験は、食事の面においては若干現実離れしたものと、せつかくの局長 A 氏の意図が外れた感否めない。
- 33) セネガル人でユネスコ事務局長を務めた人物。
- 34) 移民が「文化週間」のために帰国する事実は確認できていない。また数十万人という数字も根拠がなく、いささか大げさに見積もっていると思われる。下記資料によると 2016 年のバケル県全体の推定人口は 154,210 人、バケル市では 14,802 人である。In *La population du Sénégal en 2016: Un extrait des projections démographiques du RGPHAE 2013*, Agence nationale de la Statistique et de la Démographie du Sénégal, 2016.
- 35) B 氏は某コンピュータ会社の西アフリカ総代理店の代表を務める。彼自身がもともと裕福な家庭に育ったわけではないが一代で財を成した。本稿の冒頭で紹介した首都ダカールで開催するコンサートの会場費用を立て替えるのは、彼にとって難しいことではない。またバスをチャーターして「招待客」一行をダカールからセネガル河上流域へ連れて行き、寝食を提

供することも大きな出費ではない。それよりも数日間、会社を休業して「文化週間」に費やす時間を捻出することの方がたいへんだという。

- 36) セネガルの場合、ユネスコをはじめ合衆国の国際開発庁 (USAID) やイタリアの国際援助などの介入がある。<http://uracsenegal.info/partenaires-de-lurac/>

参考文献

〈日本語〉

坂井信三

- 2003 『イスラームと商業の歴史人類学—西アフリカの交易と知識のネットワーク』京都：世界思想社。

三島禎子

- 1996 「ソニンケ社会における家族の連帯と規模—出稼ぎをめぐって」『国立民族学博物館研究報告』21(3): 77-118。
1997 「出稼ぎ労働者と地域社会—セネガル河上流域の変容」小倉充夫編『国際移動論—移民・移動の国際社会学』pp. 67-94, 東京：三嶺書房。
2001 「セネガル・モーリタニア紛争をめぐる民族間関係」和田正平編著『現代アフリカの民族関係』pp. 68-91, 東京：明石書店。
2002a 「セネガルの開発政策への一考察—農業開発における主体が語るもの」宮本正興・松田素二編『現代アフリカの社会変動—ことばと文化の動態観察』pp. 284-300, 京都：人文書院。
2002b 「国際移動と地域開発—ソニンケ移民に関する移動の主体性についての考察」加納弘勝・小倉充夫編『変貌する「第三世界」と国際社会』（国際社会 7）pp. 195-221, 東京：東京大学出版会。
2002c 「ソニンケにとってのディアスポラ—アジアへの移動と経済活動の実態」『国立民族学博物館研究報告』27(1): 121-157。
2007 「ソニンケ商人の歴史—砂漠を越え海を渡る人びと」池谷和信・佐藤廉也・武内進一編『アフリカ I』（朝倉世界地理講座 II）pp. 286-300, 東京：朝倉書店。
2011 「民族の離散と回帰—ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井洋監修編, 小川充夫編『ブラック・ディアスポラ』（グローバル・ディアスポラ 5）pp. 105-130, 東京：明石書店。

〈外国語〉

Agence nationale de la Statistique et de la Démographie du Sénégal

- 2016 La population du Sénégal en 2016: Un extrait des projections démographiques du RGPFAE 2013.

Berrigan, F.

- 1981 Les moyens de communication communautaires: Le rôle des media communautaires. *Le Développement No. 90* (série Etudes et documents sur la communication). Paris: UNESCO.

Charbit, Y. et T. Mishima (éds.)

- 2014 *Questions de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

Diagne, Y.

- 2005 Radios communautaires: Outils de développement au Sénégal, Mémoire de DEA sous la direction de Caroline ULMANN, Université Paris 13 (Villetaneuse), DEA de Communication.

Jimenez, A.

- 2019 Survie d'une radio communautaire sénégalaise: Le cas de Manoore FM à Dakar. Paris: L'Harmattan.

Lewis, P.

- 1984 *Le rôle des médias en zones urbaines*. Paris: UNESCO.

- Machuelle, F.
 2004 *Les diasporas des travailleurs soninké(1848–1960): Migrants volontaires*. Traduction de R. Masseaut. Paris: Karthala.
- Mishima, T.
 2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké: Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima(éds.) *Questions de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*, pp.99–124. Paris: L'Harmattan.
- Pollet, E. et G. Winter
 1971 *Société soninké*. Edition de l'Institute de Sociologie de l'Université Libre de Bruxelles.

〈ウェブサイト〉

- Adjovi, Emmanuel V.
 2007 La voix des sans-voix : la radio communautaire, vecteur de citoyenneté et catalyseur de développement en Afrique. (Internet, 10th December 2019, <http://africultures.com/la-voix-des-sans-voix-la-radio-communautaire-vecteur-de-citoyennete-et-catalyseur-de-developpement-en-afrique-7104/>)
- UNESCO
 1989 «Rapport final du Conseil intergouvernemental du Programme international pour le développement de la communication (Dixième session) Paris, 7–13 mars 1989» Paris: UNESCO.
 2001 *Manuel de la radio communautaire*. (Internet, 10th December 2019 https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000124595_fre)
 2014 La radio communautaire favorise le développement local à travers l'Afrique 26/06/2014, (Internet, 10th December 2019, www.unesco.org/new/en/media-services/single-view/news/la_radio_communautaire_favorise_le_developpement_local_a_t/)
- Union des Radio associatives et communautaire (Sénégal)
 Page accueil (Internet, 10th December 2019, <http://urascenegal.info/>)
 Partenaires (Internet, 10th December 2019, <http://urascenegal.info/partenaires-de-lurac/>)
 Statuts de l'URAC (Internet, 10th December 2019, <http://urascenegal.info/status-de-lurac/>)

参考資料

三島禎子監修

- 2016 「セネガルの生活と文化」『みんぱく映像民族誌』第21集（撮影・制作 国立民族学博物館）日本語，65分
 2020 「セネガルを越える人と地域ラジオ」『みんぱく映像民族誌』第34集（撮影・制作 国立民族学博物館）日本語，118分

国立民族学博物館ビデオテーク

三島禎子監修

- 2001 S04490 ジャワラ村の藍染め
 2001 S04497 パリ～ダカール～ジャワラ村——セネガル・ソニンケの出稼ぎ社会
 2001 S04498 ジャワラ村——アフリカ・ソニンケの人びと
 2019 S05285 （長編）ただいまオンエア——ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ
 2019 S05286 （短編）ただいまオンエア——ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ
 2019 S05287 （短編）私たちが主役——ソニンケの文化週間を支える女性たち
 2019 S05288 （短編）グリオは語る——今と昔をつなぐなりわい